

西夏語韻図

『五音切韻』の研究（上）

西田龍雄

第一章 西夏における言語研究と韻書の作成

1032年、李元昊が中国西北の地に、西夏国を建設し、1936年に国定文字いわゆる西夏文字を制定して以来、西夏では自国語の研究が盛んに進められた。これには、中国の学問とくに宋代に発達した音韻学の研究が、その基盤をなしていると考えられる。西夏人が編纂した研究書（写本、刊本）は、そのすべてが現在まで伝えられているわけではないが、決して少ない数ではなかった。

当時の西夏語の研究は、政府の公の機関で行われると共に、また民間人によっても進められていた。たとえば、政府の刻字司で出版された『同音』は前者であり、一般によく知られる『番漢合時掌中珠』は後者の代表と言える。そして、研究分野は、かなり多岐にわたっていたが、1) 音韻研究、2) 文字研究、3) 語彙研究に大別できると思う。

本稿では、はじめにあげた音韻研究を中心に述べてみたい。

西夏人は、中国の音韻学を学び、その影響のもとに、数種類の韻書を作成した。おそらく、西夏に帰属した漢人が、この仕事に協力したものと思われる。漢字に置き換えると『同音』（刊本）『文海』（刊本）『文海雑類』（刊本）『五音切韻』（写本）となる韻書韻図と、その書名を推測し難い韻書の断片数枚が現存している。このほかに『文海宝韻』（写本）と呼ばれる写本がコズロフ蒐集品中に含まれていたが、今は行方がわからない⁽¹⁾。

Nevsky は、確かに『文海宝韻』を利用しており、現在レニングラードの東

(1) これらの韻書の概略については、西田龍雄『西夏文字—その解読のプロセス』（紀伊国屋書店1967、増補再版 玉川大学出版部 1980）を参照されたい。また M. B. Софронов, *Грамматика Тангутского Языка I* Москва 1968 にも解説がある。

方学研究所にある Nevsky Archiv の中の遺品には、『文海宝韻』からの引用が多く含まれ、1969年にモスクーで出版された Кычанов 等が編集した *Море Письмен Факсимиле Тангутских Ксилографов* 『文海』一タングート語刊本の複製』巻二上声韻類の部分は、主に Nevsky が『文海宝韻』から引き写した資料を基にしたものである⁽²⁾。このもとのテキストが散佚したことは、西夏語研究にとって大へん惜しい。

西夏人は、西夏語の一音節 CVC / T (Cは子音, Vは母音, Tは声調を示す) を、漢語の分析法に倣って、C- と -VC / T の二つの部分に区切った。たとえば pu (平声) という音節を、p- と -u (平声) に分析した。

初頭音 C- の性格にしたがって、すべての文字を九つの大部類に分け、さらに各部類の中を -VC の種類によって分類したのが旧版『同音』であり、その -VC の種類を -VC / T の違いから厳密に弁別して、より詳しく分類し改めたのが新版『同音』である。

これに対して、はじめにT声調の相違によって、平声と上声の二類に大別し、それから -VC の種類、平声九十七韻、上声八十六韻にしたがって排列し、さらに初頭音 C- の性格から、各韻類内部の文字を分けたのが『文海』である。したがって『文海』は、もともと上下二巻から成りたっていた。

『文海雑類』は、また少し構成法が違っていて、まず初頭音 C- によって文字を九類に分類し、ついで声調 T の相違から、さらに韻類 -VC の種類(ただしその種類は明示されていない)にしたがって排列したものである。

『同音』には、原則として一字注(ときには二字・三字の注もある)がつけられたが、『文海』と『文海雑類』には、字形の分析と意味の解説とさらに音形式を示す反切がつけられている。

書名のわからない断片数枚は、『同音』(新版)の文字排列の順序にしたがい、各文字ごとに『同音』の注と『文海』『文海雑類』の注をも、簡略な形にしてつけ加え、反切を添えた総合的な性格の韻書である。

そして、初頭音(=声母) C- と母音(普通母音, 緊喉母音, 捲舌母音) + 声調(=韻母) -VC / T の組み合わせ関係を、各韻類ごとに限定した範囲で、表あるいは図にしているのが『五音切韻』である。『五音切韻』には、あとで詳述するよ

(2) 西田龍雄「E. И. Кучаев等著『文海一タングート語刊本の複製』書評」『東洋学報』52巻2号, 1969を参照。

うに、いわゆる韻図のほかに、漢語の三十六字母体系を基準にして、特定の西夏語韻母との結合関係を表にした韻表が九種類ついていて、西夏語の音形式の再構成にあたって、他の韻書と同様に、重要資料の一つに数え得ることは、疑いがない。

第二章 西夏語音形式の再構成と韻書・韻図

言語学に音素分析とよんでいる操作がある。これは簡単に言うと、特定の言葉における示差的な機能をもった音単位とその組み合わせ様式を抽出する作業のことである。音素分析はその言葉の具体的な発音を取り扱う音声記述にもとづいてなされるが、音声記述とは区別されなければならない。いわば音素分析は、言葉の構造的な骨組みを取り出し、音声記述は、その骨組が特定の形をとって現れる音価を記録するところに主眼を置いている。いま述べた数種類の韻書は、西夏人の手になる西夏語の音素分析の結果であると言える。西夏語の音素体系の骨組みは、これらの韻書の中で、いろいろの角度から整理されている。したがって、これだけの韻書が整いさえすれば、西夏語の音素体系は、たちどころに解明できるものと考えられる。確かにその通りなのであるが、実際には、それには現実的な障害がともなっている。第一に、これらの韻書は、書名のわからない断片の中、二枚がロンドンにあるのを除くと、すべてレニングラードの東方学研究所に所蔵されていて、それらを利用するのがかなり困難であった。しかし、この障害は、現在では、克服することができた。私は現存する韻書類のほとんどすべてを、レニングラードで直接調べることができた⁽³⁾。ところが第二に、もっと根本的な障害が、資料自身に含まれているのである。ほぼ完全な形をとっている『同音』のほかは、いずれも不完全な状態でしか、それらの韻書は残っていない。実は『同音』さえも、厳密に言えば、旧版も新版も（これについては後述する）共に欠けたところがあって、完本ではない。『文海』は、さきに述べたようにもともと上下二巻からなるが、いまは上巻の平声韻のところだけが残っていて、下巻はない。その上巻も、序と跋を欠き、途中散佚している個処もある。『文海雑類』にいたっては、20枚ほどしか残存していない。『五

(3) 筆者のレニングラード滞在中、西夏文献の閲覧に際し、種々の便宜を与えられた東方学研究所副所長 E. И. Кычанов 博士はじめ研究所の諸氏に深く感謝したい。

音切韻』は、現存する諸本を相補って、ほぼ完本に近い形に復元できるが、やはり欠けたところが残る。

これらの事実は、致命的ではないにしても、現存する諸資料を利用し、補足しあって西夏語の音形式を復元再構成するには、かなりの困難があった。未解決の問題は、いまなお残されている。

西夏語の音形式の再構成が厄介なもう一つの理由は、西夏人の音素分析の結果が誰にでも簡単にわかるような形で示されていない点にある。つまり分析の結果は、すべて西夏文字の等式として与えられているのである。現存する資料からどのような等式を取り出し、それをどのように解き、どのような音価を与え得るかが再構成のための操作の主体となるのである。⁽⁴⁾

私はかなり以前にその操作を試みたが、さらに新しい資料によって、ここでは『五音切韻』という韻表と韻図を対象として、以前の結果を検討し、補整してみたい。それが本論稿の主題である。

第三章 西夏語韻書の系統

まず、西夏語の韻書の系統について、もう少し詳しく述べてみよう。

レニングラードの Кычанов をはじめとする西夏研究者は、さきあげた *Море Письмен* 『文海』に掲載した論文の中で、『文海』上下二巻、すなわち平声韻の部と上声韻の部、そしてその補遺として扱っている『文海雜類』を一まとめにして、この三部からなる韻書があって、それが『文海宝韻』であったと推測するに十分な根拠があり、この考えは、はじめ Nevsky によって提唱されたと述べている。つまり『文海宝韻』という書物は『文海』上下二巻と『文海雜類』の総称であったと考えるのである。

確かに現存する『文海』を従来から『文海』という名でよぶ根拠は、蝴蝶装の中央に書かれた名称に従っているのであって、その書物の表題はどこにも残っていないのであるから、『文海宝韻』を略して、『文海』と称していた可能性も十分にあり得る。その書物が序も跋ももたないのは、この点でも誠に残念で

(4) 西田龍雄「西夏文字の解讀」『数理学』1968, 11月号を参照。

(5) 西田龍雄『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解讀』上・下 座右宝刊行会1964~1966 および注(1)にあげた拙著『西夏文字』に詳しい。

ある。『文海』の正しい書名が『文海宝韻』であったか否かは別として、私は『文海』と『文海雑類』を同じ一つの韻書の一部として扱う考えには賛同し難いのである。私は『文海』と『文海雑類』は、本来系統のやや異った韻書であったと考えている。それには二つの積極的な根拠がある。

第一に確かに『文海雑類』に含まれる文字は、現存する『文海』には含まれていない。その点では、両者は補い合った内容をもっていると言える。しかし上述したように、この両者は韻書としての構成の仕方がかなり違っているのである。その補遺の部分（『文海雑類』にあたる）だけを、異った構成法で整理したとは考え難いと思われる。

第二に『文海雑類』の原型として、『雑類』という名の韻書が存在していた。その一部の断片が、コズロフ蒐集品中に現存するのである。この『雑類』の存在は、いままで全く知られていなかったのであるが、レニングラードの西夏文資料の中で『五音切韻』の一部としてまとめられている資料(No. 4154 と No. 5867)の中に、その断片数枚が含まれているのを、その資料を調査している時に、私は見付けた。幸にテキストの最後の部分と跋の端片が残っていて、はっきりと雑類とよめる。その内容を検討すると、驚いたことに『文海雑類』の現存する部分とよく一致しているのである。雑類は立派な用紙に見事な書体で書かれていて、縦野のみがあって（半番7行、一行12字詰と推定）かなり初期の写本であると思わせる⁽⁶⁾。それらの断片は、裏打ちもされない未整理の状態にあって、番号が付けられていないが、いま仮りに『文海雑類』の順序に合わせて、発掘番号のあとに仮番号を与え、『文海雑類』と対照して示すと、つぎのようになる。

『雑類』はかなり重要な資料であると考えられるので、残っている断片に登録された文字をすべてあげておきたい⁽⁷⁾。なお、××音および上声とあるところは西夏字を漢字に改めて欄外に引き出して掲げたが、もとのテキストでは他の西夏字と同じ高さで見出しの形をとって書かれている。

(6) 初期のものほど立派な紙に見事な書体でのびのび書かれているが、時代を経るにしたがって、紙質が悪くなり、あるいは古い経典の裏を利用して書いている。

(7) これらの韻書で、一とまとまりとして書かれている西夏字は、何らかの意味で共通点をもっている。その共通点の解明が、西夏語音韻体系の詳細点の解き明しと密切に関連してくる。もちろん、今の段階では、なお隠されている部分が多く残っていて、すべてがすっかりわかったわけではない。

以下、丁数のほかに a, b をつけたが、a は蝴蝶装一枚の右頁を、b は左頁を意味している。

発掘番号—仮番号『雑類』断片登録文字
No. 4154-1

該当する『文海雑類』番号

重唇音 𠂔 𠂕 欠

軽唇音 𠂖 𠂗 欠

No. 4154-2

舌上音 𠂘 𠂙 。𠂚 (…欠) 2a

牙音 𠂛 𠂜 [文字注]⁽⁸⁾ (欠) 2a

歯頭音 𠂝 𠂞 𠂟 。𠂠 (欠) 2a~2b

No. 4154-3

𠂡 (欠) 2b

𠂢 𠂣 𠂤 (欠) 3a

𠂥 。𠂦 𠂧 (欠) 3b

。𠂨 𠂩 。𠂪 (欠) 3b

𠂫 。𠂬 𠂭 (欠) 4a

𠂮 。𠂯 𠂰 (欠) 4a

No. 4154-4

。𠂱 (欠) 5a

𠂲 𠂳 𠂴 。 𠂵 (平22) 5a

。𠂶 𠂷 𠂸 𠂹 (欠) 5b

正歯音

𠂺 𠂻 𠂼 𠂽 (欠) 6a

。𠂾 𠂿 𠃀 (欠) 6a

𠃁 𠃂 𠃃 𠃄 (欠) 6b

No. 4154-5

𠃅 𠃆 (欠) 7a 𠃇 (平19)

。𠃈 𠃉 𠃊 (欠) 7b

𠃋 。𠃌 𠃍 。 (欠) 7b

𠃎 𠃏 𠃐 。 (欠) 8a

𠃑 𠃒 。𠃓 (欠) 8a

𠃔 𠃕 𠃖 (欠) 8b(欠)

(8) ここで文字の分析といっているのは、たとえば、対象となる文字が別のどの文字と同じ字形をもつかといった文字相互の字形上の関連を示したものであって、当該文字をどの文字要素に分析できるかを述べたものでないことが多い。

喉 音

No. 4154-6~7

曉 (欠)

8b(欠)

流風舌齒音

緜 𪛗 𪛘 𪛙 (欠) 𪛚 𪛛 (欠)

9a 𪛜 (上33?)

緜 𪛗 𪛘 𪛙 (欠) 𪛚 𪛛 (欠)

9b

緜 𪛗 𪛘 𪛙 (欠) 𪛚 𪛛 (欠)

10a

緜 𪛗 𪛘 (欠)

10a

(欠) 𪛙 𪛚 (欠)

10b

No. 4154-8

(欠) 𪛙 𪛚 (欠)

11a 曉 (平48)

緜 𪛗 𪛘 𪛙 (欠)

11b

緜 𪛗 𪛘 𪛙 (欠)

12a

上 声

12b(欠)

重 唇 音

緜 [文字分析] (欠)

12b(欠)

輕 唇 音

欠

No. 4154-9

緜 𪛗 [文字分析] 𪛘 (欠)

欠

No. 4154-10

緜 [文字分析] (欠)

欠

舌 上 音

緜 𪛗 (欠)

欠

牙 音

𪛙 𪛚 (欠)

欠

No. 4154-11

(齒 頭 音)

緜 𪛗 𪛘 (欠)

13b

[文字分析] 𪛗 𪛘 (欠)

13b~14a

𪛗 𪛘 [文字分析] (欠)

14a

緜 𪛗 𪛘 (欠)

14b 緜 (上52)

緜 [文字分析] 𪛘 (欠)

14b

緜 𪛗 𪛘 (欠)

15a

No. 4154-12

緜 𪛗 𪛘 (欠)

15a

[文字分析] 𪛗 (欠)

15b

	𪗇	𪗈	𪗉 (欠)	15b~16a
	𪗊	[文字分析]	𪗋 (欠)	16a
	𪗌	𪗍		欠
正 齒 音		𪗎	𪗏 (欠)	欠
No. 4154-13	𪗐	𪗑	𪗒 (欠)	欠
	𪗓	𪗔	𪗕 (欠)	17b
	𪗖	𪗗	𪗘 (欠)	18a
	𪗙	𪗚	𪗛 (欠)	18a~18b
	𪗜	𪗝	𪗞 (欠)	18b
	𪗟	𪗠	𪗡 (欠)	19a
No. 5867-1	[文字分析]	𪗢	𪗣 𪗤 (欠)	19b
	𪗥	[文字分析]		19b
喉 音	𪗧	𪗨	𪗩 (欠)	19b
	𪗪	𪗫	𪗬 (欠)	20a
流風舌齒音	𪗭	𪗮	𪗯 𪗰 𪗱 (欠)	20a
No. 5867-2	𪗲	𪗳	𪗴 (欠)	20b
	𪗵	𪗶	𪗷 (欠)	20b
	𪗸	𪗹	𪗺	20b
	[文字分析]	𪗻	[文字分析]	欠
	𪗼	𪗽	𪗾	欠
	𪗿	𪘀	𪘁	欠
	𪘂	𪘃	𪘄	欠
	𪘅	𪘆		欠
No. 4154-14 (流風舌齒音)	𪘇	𪘈	𪘉 (欠)	25a
	𪘊	𪘋	𪘌 (欠)	欠
	𪘍		(欠)	欠

No. 5867-3

𦉰 𦉱 𦉲 (欠)

[文字分析] 𦉳 [文字分析]

𦉴 𦉵 𦉶

𦉷 𦉸 𦉹

𦉺 𦉻 𦉼 𦉽 𦉽 𦉾

𦉿 𦊀 𦊁 𦊂 𦊃 𦊄

(欠) 𦊅 𦊆 𦊇 𦊈

欠

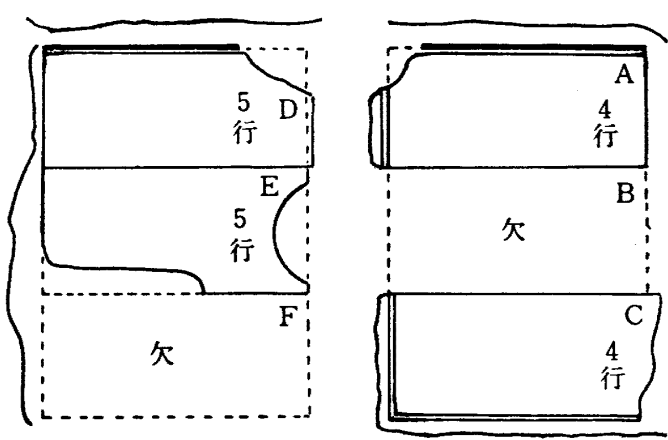
欠

欠

雜	類	終			
提	經 (拳)	録	淨	業	具 受
提	經 (拳)	録	淨	言	徳 □
			業	□	受 意

この『雑類』と『文海雑類』が共に同じ構成法をとって編纂されていることは明らかである。まず平声韻と上声韻に大別し、さらに初頭音の性格にしたがって再分類して、各音類の内部では、同音節の文字を小円によって指定する。細かい証明は省くが、『雑類』の登録文字数を『同音』にもとづいて増補し、各文字ごとに文字分析と意味に関する注と反切を加え、『文海(宝韻?)』の体裁に編集し改めたのが『文海雑類』であると考えてほぼ誤りはない。それ故『文海』と『雑類』の両方の名を合わせて『文海雑類』とよんだのであろう。

『雑類』にもところどころ文字の分析が示されているところがある。その分析は概略『文海雑類』に受け継がれたが、中には改めているものもある。たとえば 𦉺 ²dzu(上5) <坐る> に対して、もとの『雑類』では、𦉺 𦉻 𦉼 □ 「war(上73) <並んで坐る>の頭(=冠)を除く」と説明するが、『文海雑類』では、𦉺 𦉻 𦉼 xir(平86) <倦れて息がはずむ>の偏と ²dziēn(平42) <益>の傍」のように解かれている。



『雑類』跋の現存部分

『雑類』は、もともと大部の書物ではなかったようであり、それを増補した『文海雑類』も分量の少ないテキストであったのであろう。しかし『雑類』は三枚の紙を上中下三段に貼り合せた大型の書物であった。上記の諸断片のほとんどは上段の紙に書かれたところが残ったもので

ある。5867—3につづく駿の部分には、幸に中段あるいは下段の部分もあって、その端片を組み合すると前頁の図のように複元できる。上段の罫は、外側が太く、内側が細いいわゆる親子罫である。いま全体をつなぎ合せて、つぎのように判読してみた。

<p>A</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 25%;">久 搜 頒 行 不</td> <td style="width: 25%;">認 敝 駁 能 慨</td> <td style="width: 25%;">增 成 今 切 韻</td> <td style="width: 25%;">邪 筵 齋 致 遜</td> </tr> <tr> <td>智慧 盛也 譬</td> <td>孩 童 駁 駁 類</td> <td colspan="2">悟 こと 儒 詩</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="text-align: center;">純 邪 齋 徹</td> </tr> </table>	久 搜 頒 行 不	認 敝 駁 能 慨	增 成 今 切 韻	邪 筵 齋 致 遜	智慧 盛也 譬	孩 童 駁 駁 類	悟 こと 儒 詩		純 邪 齋 徹				<p>B</p>	<p>C</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">說 字 新</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">終 國 中 要 助</td> <td style="width: 50%;">多 綱 嘔 五</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(功)</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">德 王 儀 戒 教</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">陽 吉 凶 大</td> <td style="width: 50%;">歸 席 嘔 發 殿</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(陰)</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">婦 姝 緜 嫫</td> </tr> </table>	說 字 新		終 國 中 要 助	多 綱 嘔 五	(功)		德 王 儀 戒 教		陽 吉 凶 大	歸 席 嘔 發 殿	(陰)		婦 姝 緜 嫫	
久 搜 頒 行 不	認 敝 駁 能 慨	增 成 今 切 韻	邪 筵 齋 致 遜																									
智慧 盛也 譬	孩 童 駁 駁 類	悟 こと 儒 詩																										
純 邪 齋 徹																												
說 字 新																												
終 國 中 要 助	多 綱 嘔 五																											
(功)																												
德 王 儀 戒 教																												
陽 吉 凶 大	歸 席 嘔 發 殿																											
(陰)																												
婦 姝 緜 嫫																												
<p>D</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 75%;">駁 訖 齋 駁 報</td> <td style="width: 25%;">女 筵</td> </tr> <tr> <td>珂 貝 種 々 等</td> <td>要 是</td> </tr> </table>	駁 訖 齋 駁 報	女 筵	珂 貝 種 々 等	要 是	<p>E</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">丑 歲 五 年 八 月 五 日 到 四</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">能 隆 駁 夜 翹 統 陶 隆 發 發</td> <td style="width: 50%;">行 今 漢 文 業 明 西 天 番 漢</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">(韻)</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">級 夜 鬚 齋 嘔 聃 邪 僂 龍 駁</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">西 夏 文 字 を 忘 れ ざ る こと 五 音 切</td> </tr> </table>	丑 歲 五 年 八 月 五 日 到 四		能 隆 駁 夜 翹 統 陶 隆 發 發	行 今 漢 文 業 明 西 天 番 漢	(韻)		級 夜 鬚 齋 嘔 聃 邪 僂 龍 駁		西 夏 文 字 を 忘 れ ざ る こと 五 音 切		<p>F</p>												
駁 訖 齋 駁 報	女 筵																											
珂 貝 種 々 等	要 是																											
丑 歲 五 年 八 月 五 日 到 四																												
能 隆 駁 夜 翹 統 陶 隆 發 發	行 今 漢 文 業 明 西 天 番 漢																											
(韻)																												
級 夜 鬚 齋 嘔 聃 邪 僂 龍 駁																												
西 夏 文 字 を 忘 れ ざ る こと 五 音 切																												
<p>(天)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">賜 禮 盛 國 慶 初 年 七 月</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">禱 嘔 發 頤 齋 雜 報 者 齋</td> </tr> </table>	賜 禮 盛 國 慶 初 年 七 月		禱 嘔 發 頤 齋 雜 報 者 齋																									
賜 禮 盛 國 慶 初 年 七 月																												
禱 嘔 發 頤 齋 雜 報 者 齋																												

〔断片DとEを継ぎ合わせ複元した形〕

No. 4154

軽唇音類が完備するのみで、そのほかはいずれも一部しか残っていない。コズロフ・コレクションの3枚は、裏面の經典を無視して裏打ちされているが、残片5枚とも裏面の經典の文字が表面に映り、表面の西夏文字はかなり判読し難い。

この韻書の体裁は簡単に言うと、『同音』に『文海』『文海雜類』の注を加えたものであるが、名文字の下には、(1)一字注 (2)文字の分析 (3)意味の注解 (4)反切 (5)声調 (6)出典韻書、この(1)から(6)までの情報が記入されている。

(1)は『同音』の注をそのまま使い、(2)は『文海』と『文海雜類』の分析を大体受け継ぐが、(3)は『文海』『文海雜類』の注を簡略化し、あるいはときに別の解説を入れている。(4)反切についてはあとで詳しく述べる。(5)声調は平、上のほかに、平去と平上がある。(6)その文字が『文海』に属するときには明示がなく、『文海雜類』に入っている場合にのみ、**𐰽** (雑) と書き込まれている。

ここでも、『文海 (宝韻)』と『文海雜類』を、はっきりと別扱いしているのである。

この韻書の中で、各文字に与えられている情報を、一例をあげて示してみよう。右側がその日本語訳である。

<p>𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽</p> <p>① ②</p> <p>𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽</p> <p>③</p> <p>𐰽 𐰽 𐰽 𐰽</p> <p>④ ⑤ ⑥</p>	<p>塚 ① 墳 ② 高十巧の傍</p> <p>〔高の傍，十の偏と巧の傍〕</p> <p>③ 土墳，墓，漢語〔で〕墳台と謂う</p> <p>④ l-i*ON(平57) ⑤ 平 ⑥ 雑</p>
---	---

(6)に雑と書かれていて、『文海雜類』からこの注を引用したことを示しているから、調べてみると、幸にして残っている部分にこの文字があった。『文海雜類』では (12a)，つぎのようになっている。(1)は無く、(2)は同じで、(3)は **𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽 𐰽** 「塚とは、土墳なり、墓なり、部姓を亦た謂う」となり、(4)の反切は同じく、(5)と(6)の情報はない。このテキストで各文字につけられた意味の解説も、とくに上声韻の場合は、『文海』の下巻が散逸しているいまでは、その文字の意味解読の確証として極めて重要である。二つ例をあげてみたい。

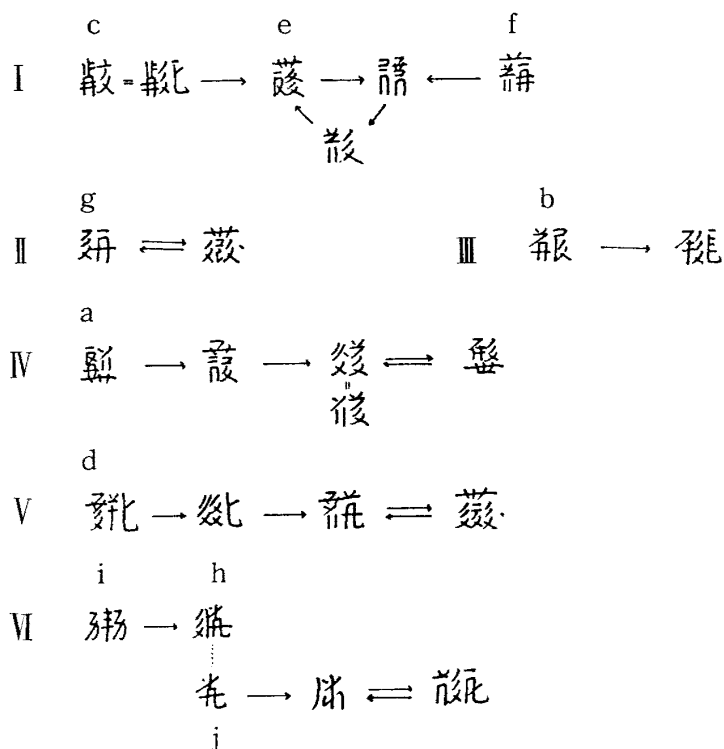
No. 6685 喉音類の中に

各文字につけられた二種の反切の中，上段（原本では縦書き右側）に書いたのは、『文海』『文海雑類』で使われた反切と一致し，下段（原本では左側）に置いたのが新しい反切である。新しい反切の大きい特徴は，反切上字を整理統合して，**鞞** l-(来母) と **訖** z-(日母) にまとめている点にある。上にあげた例で書き換えられた反切上字を具体的に示すと，つぎのようになる。

旧い反切上字		新しい反切上字
a b c d e f g		
鞞 鞞 鞞 鞞 鞞 鞞 鞞	→	鞞
h i j		
鞞 鞞 鞞	→	鞞

そこで，書き換えた反切上字が，もとの『文海』『文海雑類』の反切上字と同じ価値を示しているのか，それとも反切の実質そのもの変っているのかを検討してみなければならない。

まず，もとの反切上字の系聯関係をたぐってみよう。上に示した反切上字の相互関係を，理解できる範囲内で系聯関係の型でまとめると，数個の反切類が成立する。



この反切上字 I 類は，漢語の来母とチベット文字表記 l- があたるグループで，西夏語 l- を代表する。II 類も同様に l- を代表すると考えてよい。

鞞	<風>	(平29)	漢	勒	チ	li	: liŋ
蔭	<笛>	(平2)		六			: liu

反切上字Ⅲ類は、それに対して、漢語の来母とチベット文字 lh- で表記され、西夏語 hl- を代表した。

莢	<琴>	莢籛	(平94の上声)	漢	量	チ	lha	: hl*o
---	-----	----	----------	---	---	---	-----	--------

ほかに 𪛗 ⇨ 𪛘 ← 𪛙, 𪛚 ⇨ 𪛛 の反切上字グループも西夏語 hl- を代表し、つぎの例がある。

𪛘	<解く>	𪛙	𪛚	(上38)		チ	lhi	: hləw
𪛗	<増す>			(平4)	漢	魯	lhu	: hluf
𪛘	<もつ>	𪛚	𪛛	(上41)			lhi	: hli*w

反切上字Ⅳ類は、漢語表記来母とチベット文字表記 ld- が対応するグループであり、西夏語 ɬ- を代表すると考えている。

𪛜	<農耕>	(平67)	漢	力	チ	ldi	: ɬi
𪛝	<怠る>	(平61)		領		lde	: ɬe
𪛞	<及び>	(平69)		勒		ldi,ldih	: ɬi

反切上字Ⅴ類は、漢語表記 ㄩ来母とチベット文字表記 r- があたるグループであり、西夏語の r- を代表した。

𪛟	<骨>	(平86)	漢	ㄩ冷	チ	re,ri	: rir
𪛠	<得る>	(平79)		ㄩ力		ri	: rir
𪛡	<弦>	(平77)		ㄩ冷			: rir

反切上字Ⅵ類は、漢語表記 日知, ㄩ移, ㄩ移則などとチベット文字表記 gz- gzh- があたるグループであって、西夏語 ž-[ńž-, ʋž-] を代表した。

𪛣	<煩わしい>	(平67)	漢	日知	チ	gzhi	: ži
𪛤	<父>	(平69)		ㄩ移則		gzi	: ži
𪛥	<小さい>	(平11)		ㄩ移			: žif
𪛦	<左>	(平69)				gzhi	: ži

そのほか、つぎの反切上字類も、西夏語 ž- を代表したと考える。

𪛧 ⇨ 𪛨 ← 𪛩 ← 𪛪

っきりしなかった。ところが、この韻書の断片の中の軽唇音類のところを見ると、**𪚩**には、平去の注がついている。したがって、この二類の対立は、一方が平声〔低い平板型〕で、他方が平去声〔平板から下降する型?〕に発音されるところにあったと推測できるのである。歯頭音類の該当部分はいまは散逸しているが、おそらく同じ種類の記入があったものと考えられる。

平声31韻では、反切下字は一類であるが、軽唇音類に同じような現象が認められる。

平声31韻

𪚩	𪚪	𪚫	-m ^v uN
𪚬	𪚭	𪚮	`m ^v uN 〔平去〕

平声12韻

𪚪	𪚫	𪚬	-m ^v *ifi
𪚭	𪚮	𪚯	`m ^v *ifi

𪚪一𪚭二𪚮
 平7 平14 平7

この反切上字 **𪚪** と **𪚭** は、共に平声12韻に属していて、違った反切上字を使って示されているが、実は **𪚪** と **𪚭** は系聯するのである。

平声31韻と平声12韻における軽唇音の対立はしたがって、この韻書に記入された平去の声調によって解決できる。

つまり反切上字 **𪚭** は `mv-〔平去声〕を代表していたことになる。

平声15韻, 19韻, 69韻にも、声母 w- : mv- の対立を認め得るが、それとともに声調の上でも、平声対平去声の対立があったことが、この韻書からうかがえる。

平声15韻

𪚪	𪚭	𪚮	-wəN
𪚬	𪚯	𪚰	平去 `m ^v əN

平声19韻

𪚪	𪚭	𪚮	-wĩa
𪚬	𪚯	𪚰	`m ^v ĩa

平声69韻

𪚪	𪚭	𪚮	-wi
𪚬	𪚯	𪚰	平去 `m ^v i

この韻書が基盤とした西夏語では、w- : mv- の対立は消失していて、曾っての初頭子音の対立が声調の対立に変貌していた可能性も十分に考え得るのである。

例 -wəN → -wəN -wĩa → -wĩa
 `m^vəN → `wəN, `m^vĩa → `wĩa

以上考察したごとく、種々の点で、この総合的な韻書は、『文海』に代表される西夏語の音体系の再構成とその後の発展を考える上で、価値の大きい情報を伝えていると言える。

No. 7837 にあった。

翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 翫 (No. 4152)

mba とは綿帽子，婦人に被せるも也
(上15)

翫 (No. 7837)

mba とは綿帽子，婦の頭に被せるべし，漢語套(?)□と綿帽也
(上15) mefmbu

反切	翫 翫 翫	tša (上15)	mbrë (上8)	mba (上15)
	翫		ya (上15)	

どのような意味があるのか未だ解明できないが，反切下字が反切上字の左側と下方の二個所に置かれている。左側の文字と下方の文字は同じ韻類（この場合上声15韻）に属しているから，どちらに読んでも反切は成立する。

この韻書の断片もまた詳しく検討する価値がある。

第四章 新版『同音』

Горбачева と Кычанов が編集したレニングラードにある西夏文献の目録『西夏語の写本と刊本』(Тангутские Рукописи и Ксилографы, Москва 1963) によると、『同音』は，発掘番号 No. 207, 208, 209, 2619, 2620, 2902, 4775, 4776, 7934 とあるが，このほかにも，『同音』の断片は残っている。またレニングラード以外でも，英国博物館のスタイン・コレクションの中にもある。私は『同音』の完璧な研究が出来れば，西夏語の研究は，音形式の再構成の面でも，語彙研究の面でも，格段に進展するものと信じている。

レニングラードのテキストの中で，最も整った『同音』は，No. 207 とNo. 209 の二つであって，前者は曾って羅福成が書写し，複製本として刊行したその原本にあたる。羅福成の筆写には誤っているところがあるが，それについては，別の機会に指摘したい。後者は，より豪華本であって，いまは裏打ちされ，丁寧に保存されているが，残念乍ら序と重唇音類のはじめの部分の欠いていて，完本ではない。しかし，後述するように，その欠けた部分の中の数枚は，いまでは補うことが可能になった。

才の序の中の，大臣悲みを起す等の四句也」，今此本，それなり，此れ亦眼心□□未だ離れず，徳育，此の文を見て雑乱あるを(うれい)，文海宝韻と詳かに比べ，勘校し，よくよく訂す。忘失を正し，含まず，新たに造り，□を亦た増す。秀智夫子，此本を校するとき，謗謙を起すなかれ，増減を測り，理……」
 第二葉 龍龍禱龍 同音原序は No. 207の序と一致するが，ただ2bの三行目に，大字六千一百三十三，註字六千二百三十とある実数は省かれている⁽¹²⁾。

この新版序から No. 209は、『文海宝韻』(=『文海』?) のシステムと照合して，旧版 No. 207を改訂したものであることがわかる。改訂した主な点は，旧版においては，小円から小円までの一類に，平声韻も上声韻も混入させていたのを，『文海宝韻』(=『文海』?) の韻類分けに合わせて，はっきり弁別したことと，注字をところどころ改めている点であると思われる。この序文を書き，そして新版の編集に力をつくした徳育は，当時の一級の学者であり，このほかに『新集錦合掌置文』や『同義一類』の著者でもあった。またさきに述べたように，この序文から，切韻博士なる称号が，当時西夏でも使われていたことも明らかとなる。

また重要なのは，この序文に出てくる『三才(雑字)』から引用した四字は，『三才雑字』の序文の中に確認できることである。この例も含めて，最近は，西夏の文献相互の関聯がやや明らかになって来たと言える。

現在レニングラードで立派に装丁され保存されている新版『同音』(No. 209)は，7bから51a と52から成っている。いま序文を含む 1a から 4a (4bは小片)までの欠けた部分を，断片として残っていたものから補った。ところが，さらに No. 4775 に含まれる一片から，7aを補足することができる。この一片は7bに残る7aの左一行の残存文字とびたりと一致し，それから分離したものであることは歴然としている。また，No. 209 で51の丁数がつけられているところは，実際は52であり，50a は51a が正しい。そして No. 208の資料から51bを補うことができる。それ故，新刊『同音』は，全体で丁数1から4aまでと，7から52までが残っていることになる。

No. 209		7b-49	50a	51a	52
補足できる部分	1-4a	4b (小片)	7a		51b
	No. 208	No. 4775		No. 208	

なお上表にあげた No. 208は，新版『同音』の残片の集合であり，つぎの数

(12) 旧版『同音』の序は拙著『西夏語の研究』I pp. 16—以下を見られたい。

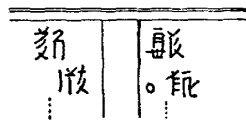
葉が含まれている。丁数 1—4, 10—12, 14—15, 20—24, 25—31 (29は二枚ある), 48—49, 51b—52。

No. 4776は、『同音』の残片を4冊に貼り合せたものであり、大部分が新版の断片であるが、旧版の断片も少数含まれている。4冊の内容を示すとつぎのようになる⁽¹³⁾。

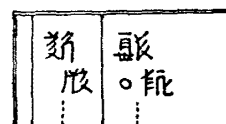
1. 経典そのほかの残片を貼り合せたもの
2. 『同音』断片を貼り合せたもの
3. 『同音』端片 (いずれも下半分が欠ける) 小端片 4枚と半分
4. 『同音』端片, 大半は下の部分が欠ける

この中には、新版と内容は合致するが、行の配分が異り、柱の立て方も違っている断片が含まれている

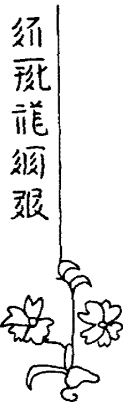
新版22葉



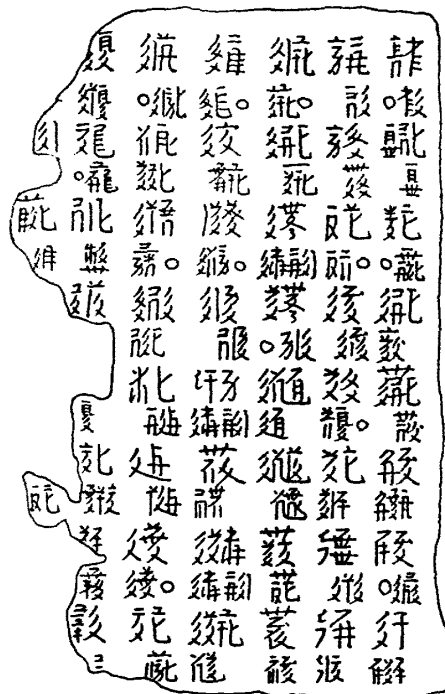
No. 209



No. 4776 断片



No. 4776 20葉左
舌上音四品の下
余白には花が描か
れている



新版『同音』断片 重唇音類 (7a) No. 4775.
No. 207 11a, No. 209 7a に該当する。

(13) 上掲注(6) レニングラード目録22 (p. 50) に該当する。

新版『同音』の中にも、いくつかの版本の違いがあったらしい。一般に『同音』には、蝴蝶装の中央に、書名 龍龍 が入っているが、その文字が黒地に白抜きになっているのもあり (No. 2619), またその断片では書名の下につけられた丁数が、西夏字ではなく漢字で書かれていた。

『同音』の断片を取り上げる場合少くとも、旧版か新版かどちらに属するものであるかを決定しなければならない。スタイン・コレクションに含まれる断片は、すべて後者であった。

第五章 西夏語韻図『五音切韻』

第一節 『五音切韻』の諸写本とその内容

つぎに、本稿が対象とする『五音切韻』について詳しく述べてみたい。『五音切韻』には数種類のテキストが現存している。それらはすべて写本であって、刊本は含まれていない。いずれもレニングラードの東方学研究所に所蔵されていて、現在のところそのほかにはどこにも発見されていない。

レニングラードの所蔵本は、発掘番号 No. 620, No. 621, No. 622, No. 623, No. 624 として知られているが、そのほかにも数種類の断片があった。

その各々の体裁と内容について、まず説明したい。

No. 620 羊皮で表と裏をつつんだ蝴蝶装の小冊子である。⁽¹⁴⁾ 上質紙に書かれ、朱で丸印がつけられている。この書物の体裁と内容について述べると、はじめに三葉半 (1頁から6頁) の序文がある。それにつづいて「九音韻門」という見出しで、いわゆる三十六字母が掲げられている (6頁~7頁)。この三十六字母は、漢語の三十六字母をそのまま西夏文字にあてはめたものであって、西夏語の声母の体系を忠実に代表しているものではない。この字母のあとに韻表が7表ついている (8頁~14頁)。第一表は、舌頭音類の声母と平声1韻, 5韻, 3韻, 20韻, 36韻の結合関係を示したものであり、第二表は、舌上音類・正歯音類の声母と平声55韻, 29韻, 56韻, 41韻, 44韻の結合関係を表にしている (後に詳述する)。各々の韻類がどのような根拠によって選び出されているのか、いまはわからない。舌頭音類の前に、重唇音類と軽唇音類の二頁が欠けていること

(14) 上掲拙著『西夏文字』参照。

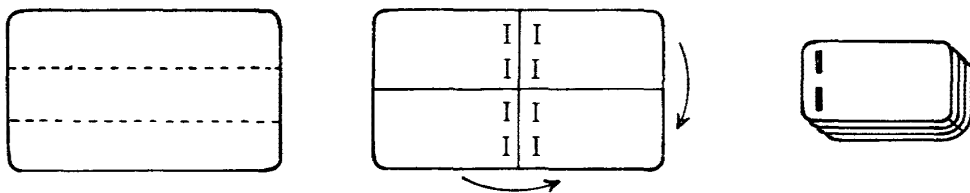
は容易に推測ができる。

七番目の韻表の最後に、「衆漂海入門」とあって、その次の頁から終りまでいわゆる韻図が収められている。この韻図は、平声1韻＝上声1韻からはじまって、平声58韻＝上声51韻まで合計六十一図ある。各々の図は、縦が九欄、横が六欄（実際には、この中、五欄のみを使う）に仕切られており、各駒の中に、西夏文字または朱で書いた小円が記入されている。文字が置かれているところはその音節があることを示し、朱丸のところは該当する音節がないことを示すのである。これについてはあとで具体的な例について説明しよう。

最後に乾祐癸巳年歳と日付があるから、このテキストは1173年に書かれたと見てよい。

No. 620 の内容は、したがって、大別すると、韻表「九音顕門」と韻図「衆漂海入門」の二つから成り、それに序がついていることになる。これが『五音切韻』の基本的な体裁である。私は当初韻図が平声58韻＝上声51韻で切れているところから、『五音切韻』ははじから完結しなかった書物ではなかったかと推測していたが、その考えは誤っていることが明らかになった。No 621以下のテキストを見ると、平声58韻につづく韻図も実際に残っていたのである。

No. 621 は、かなり厚手の紙を上下に三枚つなぎ四つ折りにしたもので、今は裏打ちされ線装されている。薄い縦罫がつけられ、全体で五十六頁ある。



序文はついていないが、概略 No. 620と同じ内容をもっている。まず、韻表「九音顕門」がある (1a～5bの10頁)。その 1a (1頁の意味) のはじめに置かれる4行は、流風音類であって、本来韻表の最後に来るべき内容が誤って置かれたものであるが、そのあとには No. 620には欠けていた重唇音類から始って、軽唇音類の韻表も含まれている。ついで「衆漂海入門」終、「韻母纏繩門」とあり、平声1韻＝上声1韻から平声43韻＝上声38韻までの韻図が収められる。途中に何故か平声50韻＝上声43韻と平声51韻＝上声44韻の韻図が混入しているが、これは偶然に誤って挿入されたのであろう。

韻表および韻図において使われている小円には、黒で小円を描きその内部全

体を朱で塗りつぶしたのと黒枠の内側にそって朱を入れたのと二種類が使われているが、その二つは弁別して使われていたのではないと考えられる。No. 620と No. 621は、文字および小円の分配に異同があるが、それについてはあとで述べたい。

No. 622 質の悪い薄い紙を中央でつなぎ合わせて使ったものであるが、そのつぎ目のところを表と裏両側から薄い白紙を貼り合わせて裏打ちしている。全体で29枚あり、各頁には7行または9行の縦罫があり、横の段には、上下のみ罫がつけられている。朱筆は使われていない。

No. 622 には、序文と韻表はなく、韻図のみ平声45韻＝上声40韻から平声94韻までつづいている。ただし、平声87韻、89韻、90韻の韻図は欠け、また平声91韻＝上声82韻は、韻図の一番始めに置かれているが、これは明らかに綴り誤りである。さきに述べた No. 621に含まれた平声50韻＝上声43韻、平声51韻＝上声44韻は、もともとこの No. 622の一部であったに違いないから、内容から見て、No. 621と622は補い合っていて、本来連続したものであったのだろう。

No. 621 韻表 韻図 (平声1韻＝上声1韻～平声43韻＝上声38韻)

No. 622 韻図 (平声45韻＝上声40韻～平声94韻)

各韻図における西夏字および丸印の分配は No. 620とはやや異同があるが、それについては各々の韻図において指摘したい。

No. 622 の特徴は、各韻図の左側に2行にわたって、つぎにあげる特定の韻母代表字が各韻図を通じて記録されている点にある。

𐰽 𐰿 𐰻 𐰼 𐰽 𐰾 𐰿

平1 平2 平8 平11 平17 平64 平27

𐰽 𐰿 𐰻 𐰼 𐰽 𐰾 𐰿

上27 平33 平36 平43 平56 平49 平51

この14の代表字は、一体何を意味するのであろうか。これは、明らかに二文字づつ対をなして、何らかの意味で西夏語の基本母音の対立を示したものと考えられる。私の再構成音にしたがうと、つぎのようになる。

平1	—u	平8	—i	平17	—a ^h	平27	—a ^h
平2	—iu	平11	—i ^h	平64	—a	上27	—i ^h
平33	—ε	平43	—əw	平49	—ɔ ^h		
平36	—e ^h	平56	—i ^w ON	平51	—i ^ɔ h		

これは、概略

	前	中	後
高	—i	—i —u	—u
中	—ε	—ə	—ɔ
低	—a		—ɑ

の対立を代表しているように推察できるけれども、なお細部については検討を重ねる必要がある。

No. 622 では、韻図のあとに、

韻母纏繩門 (26b)

衆漂海入門

平上終

是、切韻、持、者 □□□□ (草書)

是、切韻、持、者 (27a)

□□□□□□□□ (草書)

とあり、最後の三頁 (27b, 28, 29b) には、つぎの五字句が四句書かれている。

廡廡窳窳狻 一切上方下 (27b)

脛筭窳窳隄 天地界諸昔 (28)

紉窳孺窳窳 日月爾時現 (28)

廡廡窳窳窳 一切間希謂 (29b)

この中間の二句は、西夏の文学作品『新集金碎掌置文』の初頭に出て来るつぎの二句と一致する(界諸は世界の書き誤りであることがわかる⁽¹⁵⁾)。

脛筭窳窳隄 天地世界昔 (天地世界の (その) 昔)

紉窳孺窳窳 日月爾時現 (日月はその時現れました)

おそらく『五音切韻』は、『金碎掌置文』とほぼ同時代に作られたのである

(15) 『新集金碎掌置文』の内容の一部は、拙稿「西夏」『モンゴル帝国』世界歴史シリーズ12 世界文化社 1969 で紹介した。それは Eric Grinstead, *Tangut Studies*, Leiden. IDC microfiche のテキストにもとずいたが、その後 Кычанов のロシア語訳が公表されている。“Крупинки Золота на ладони”—Пособие для Изучения Тангутской Письменности. *Жанры и Стили Литератур Китая и Корей* 「掌中の黄金の粒—西夏文字研究に対する資料—」『中国と朝鮮文学のジャンルとスタイル』モスコ—1969所収。

う。

No. 623 の『五音切韻』は、小型 (10×7.5cm) の写本であって、薄い白紙で表裏が被われている。全体は 184 頁ある。はじめに誤って韻類代表字 蘧 (平声 91 韻) と 蘧 (平声 92 韻) の韻図が置かれ (1a, 1b), ついで喉音類と正歯音類の欠けた個処の多い韻表があり (2a, 2b), そのあとに,

九音之韻母纏繩順 終 (3a)

五音切韻

衆漂海入門□

衆漂海入一百五韻門 (3b)

訶 茶 龍 麟 解 喘 駭	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7
逦 頤 芟 後 藪 鞞 危	平8	平9	平10	平11	平12	平13	平14
瓊 葩 後 兪 齋 璣 窮	平15	平16	平17	平18	平19	平20	平21

のごとく, No. 620 の序文に書かれている一百五韻の代表韻字が, 平声 1 韻から平声 21 韻まで掲げられている。そのあとの頁 (4a) には, 牙音類の韻表の最後の部分七字のみ残っている。そして, 平声 3 韻・上声 3 韻以下の韻図がつづくのである。

No. 623 の『五音切韻』のもっとも大きい特徴は原則として, 平声韻および上声韻の所属韻字がそれぞれの韻類のもとに記入されている点にある。

韻図に余白があり, しかも所属韻字が少数の場合には, 韻図の余白に直接所属韻字を書き込み, あるいは所属韻字を書いた小片が, 頁の間に挿入されるか貼付けられている。別に 2 包みの小片集がついていて, それによって挿入あるいは貼付されていない所属韻字を補うことができる。つまりその包みは, 整理の折, 切り離された端片を集めたものであって, 極めて貴重な資料である。

具体的に示すと, たとえばつぎのような体裁をとって, 所属韻字を書いた小片が二重・三重に貼付けられている。5b の上に 6a が, さらにその上に平声 4 韻上声 4 韻の所属韻字を書いた小片が貼付けられているのである。またその上には, 平声 93 韻・上声 86 韻の所属韻字を小さい字で記入した小片があった。

韻図は, 平声 3 韻＝上声 3 韻から平声 89 韻＝上声 80 韻までである。その中, 前半平声 58 韻までは, No. 620 と大体同じであり, 後半平声 59 韻以降は, No. 624 に近い。ただし, 平声 1 韻＝上声 1 韻, 平声 2＝上声 2 韻, 平声 82 韻＝上声 74 韻および平声 83 韻は欠ける。平声 90 韻＝上声 81 韻は 16a に, 平声 91 韻＝上声 82

平44—上39	平58—上51	平73—上66	平87—上78
平45—上40	平59—上52	上67	平88—上79
平46	平60—上53	平74—上68	平89—上80
上41	平61—上54	平75—上69	平90—上81
平47	平62—上55	平76—上70	平91—上82
平48	平63—上56	平77—上71	上83
平49—上42	平64—上57	平78	上84
平50—上43	平65—上58	平79—上72	平92—上85
平51—上44	平66—上59	平80—上73	平93—上86
平52—上45	平67—上60	平81	平94 小片 (7字)
平53—上46	平68	平82—上74	平95 小片 (4字)
平54—上47	平69—上61	平83	平96 小片 (3字)
平55—上48	平70—上62	上75	平97 小片 (4字)
平56—上49	平71—上63	平84—上76	
平57	平72—上64	平85	
上50	上65	平86—上77	

No. 623の『五音切韻』において所属韻字がついていない韻類は、上に表示した通りであるが、その中、平声1, 2, 37, 38, 67, 82, 83の諸韻は『文海』から大部分がわかるため、この『五音切韻』および『文海』から知ることのできない所属韻字は、上声1, 2, 25, 33=平36, 上34, 上60, 上74の諸韻となる。しかし、それらの所属韻字も幸にして、上述したように、Nevskyが『文海宝韻』から書き写した資料によって判明し、すでに *Море Письмен* の中で公表されている。しかしそれによっても、なお上声85韻の所属字はわからなかった。ところが、この No. 623には、つぎの14字が記入されているのである。

『同音』のシステムを根拠にして、欠けているところ4字(AおよびB)を補うことができるから、上声85韻全体の18字がそこで判明する。

また上声86韻には、代表字 𪛗 のほかに、𪛘 𪛙 𪛚 の3字と、『同音』で、はじめの文字と同じ小類に属する 𪛛 が所属したと考え得る。

No. 623の『五音切韻』は、以上述べたようにいろいろの点で、極めて貴重な情報源であると言える。

No. 624 の『五音切韻』は、全部で60枚 (1a—60b) から成り (ただし58枚目は

重複している), 薄紙の経典の裏面に書かれている。序と韻表はなく, 韻図のみが『新集金砕掌置文』とよく似た立派な書体で書かれ, 縦罫は引かれていないが, 紙を折って行をつけた跡が認められる。ほかのテキストと同じように一頁に一韻図を置くのを原則としているが, ときに平声23韻=上声21韻を上段に, 平声24韻=上声22韻を下段に置くように(7b), 一頁に2つの韻図を並べているところもある。

また, ところどころ小円の右側に, 小さい字体の書き込みがなされている。たとえば, 平声60韻=上声53韻の最右列は, ○○ piε ○とあるところ, はじめの2つの小円の右側に, mīε (上53), pε (上54) の2字が書き込まれている。

- 泚
 - 僣
 - 𪛗
 -
- 韻図は平声20韻=上声17韻から始まり, 上声84韻で終る。最後のところは順序が整っておらず, 平88=上79 (57a) → 平83と上75 (58b上・下) → 平91=上82 (58b) → 上83(59a) → 上84 (60b) の順に並べられている (59b と 60a は白紙, 58は2枚ある)。
- したがって, No. 624 の韻図は, 全体でつぎのようになる。

平声20韻=上声17韻→平声91韻=上声82韻

上声83韻

上声84韻まで

以下, 平声92=上声85, 平声93=上声86, 平声94韻~97韻は欠けている。

『五音切韻』の断片は, そのほかにも, 雑集の中にあった⁽¹⁶⁾。

No. 4154 未整理の雑集 この中に裏打ちされていない『五音切韻』の断片が18枚含まれる。

そのほかに『同音』の断片もあった。

No. 4155 整理済み。裏打ちされた『五音切韻』の断片が13枚ある。

No. 5867 整理済み。『雑類』の断片5枚が含まれる。

No. 7192 整理済みの裏打ちされた『五音切韻』の断片26枚が紙箱に入っている。

No. 4155と No. 7192 は連続するものと考えられる。No. 4155は平声1韻から平声13韻まで, No. 7192は, 平声14韻から平声34韻までと, 平声50韻から平声51韻にあたる。平声31韻は欠ける。No. 7192は, 一頁ごとにばらばらの形で

(16) 上掲のレニングラード目録 22 に含まれる。

裏打ちされ、各韻図における西夏文字および小円の分配は、No. 622 の系統であるが、西夏文字はかなり大きい字体で書かれ、小円には朱がつけられている。26枚の内訳はつぎのようになる。

5枚 草書で書かれた経典の裏を使っている。

17枚 上下に紙を置き中央を貼り合せた用紙で、左端に **𐽀** (平声1韻) にはじまる韻字14字が置かれる。

4枚 貼り合せが離れて、上半分または下半分が残る。

以上述べて来た『五音切韻』の各テキストを総合すると、現存する西夏語の韻図はつぎのようになる。

No. 620 平声 1=上声 1→平声58=上声51

No. 621 平声 1=上声 1→平声43=上声38

No. 622 平声45=上声40→平声94 (平声89=上声80, 平声90=上声81が欠ける)

No. 623 平声 1=上声 1→平声89=上声80, 平声90=上声81, 平声91, 平声92 (平声82=上声74, 平声83が欠ける)

No. 624 平声20=上声17→平声91=上声82, 上声83, 上声84

No. 4155 平声 1=上声 1→平声13

No. 7192 平声14=上声12→平声34=上声31 (平声31は欠ける)

平声50=上声43, 平声51=上声44

これらを補い合わせると、最後の2つの平声韻類平声96韻と平声97韻のみが欠けていることになるから、西夏語の韻図は、ほとんど完備していると言える。

第二節 『五音切韻』の序文と西夏語音再構成

さて、ここで『五音切韻』自体の検討に移りたい。まず No. 620につく首尾一貫した序文から見ていこう。この序は一頁6行、一行10字詰で、やや整った書体で書かれている。

表題 五音切韻序のあと、21行がつづき、行が改められ、一百五韻母という見出しがある。そこは一行12字詰で、代表韻字が9行に並べられ、7字ごとに字間の中央に朱点がつけられている。これは、一百五韻を7字ごと一句として読む習わしになっていたことを示すのであろう。全体で15句あり(7×15=105)、最後に終と書かれている。そのつぎに九音韻門の見出しで、三十六字母が、重唇、輕唇、舌頭、舌上、牙、齒頭、正齒、喉、流風二字舌齒音の順で、九行に並べられている。

まず、この序文を訳してみよう。

侏龍瓊瓊

五音切韻序

儼齡夜瓊瓊瓊瓊瓊

今、種文ヲ觀視スルニ西、番、漢に切

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

韻有り。今、文字の五音とは、

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

平上去入各自、字母ニ現る

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

清濁平合、分離、重輕辛果、

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

上下、品ヲ現ス字切ヲ招載シ、韻母ヲ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

撰シ、句、文、藏根ヲ爲ル。撮略ヲ搜ス處

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

永ヲ常ニ忘れず、伝行すべきなり。

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

朕の功德力を以つて、今、切韻は、

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

時ニ因リ、順ヒ終る。国土を要助シ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

真ノ智慧ヲ增長シ、根仏ノ法ヲ持藏シ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

王ハ儀戒ヲ示シ、儒詩ハ清濁ヲ違ヒ、陰

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

陽吉凶季記、成法、人亦、法ヲ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

算、□何典集等、文ヲ興スの根

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

源なり。譬ヘバ大海ノ如ク、金剛ノ宝ノ諸水ヲ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

集ムル処ハ竭キズ、漲ラズ願ヒ求レバ皆有り、

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

日月ハ普ク照シ、愚モ智モ悉ク悟ル。種山ノ

瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊瓊

中、須弥ハ最高、諸業ノ中、無比

来 日 二 字 舌 齒 音	𐽀 𐽁 𐽂 𐽃 𐽄 𐽅	影 曉 匣 喻 喉 音 也	𐽆 𐽇 𐽈 𐽉 𐽊 𐽋	照 穿 牀 審 禪 齒 正 音	𐽌 𐽍 𐽎 𐽏 𐽐 𐽑 𐽒	精 清 從 心 邪 齒 頭 音	𐽓 𐽔 𐽕 𐽖 𐽗 𐽘 𐽙	見 溪 群 疑 牙 音 也	𐽚 𐽛 𐽜 𐽝 𐽞 𐽟 𐽠	知 徹 澄 娘 舌 上 音	𐽡 𐽢 𐽣 𐽤 𐽥 𐽦 𐽧
---------------------------------	----------------------------	---------------------------------	----------------------------	--------------------------------------	---------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

この序文で列挙されている西夏語一百五韻代表字の音価を、私の再構成にしたがって、少し繁雑ではあるが、つぎに示しておきたい。⁽¹⁷⁾これは、すぐあとで韻表・韻図を検討する際の基本となる。

私は、西夏語の韻母を、主要母音の調音位置および調音方法から、大きく二十二摂に分類した。

〔第一摂〕 主要母音 -u -U

平 1=上 1 -u 平 2=上 2 -ïu 平 4=上 4 -uŋ 平 3=上 3 -ïuŋ
平 5=上 5 -U 平 6 -uŋ 平 7=上 6 -ïuŋ

〔第二摂〕 主要母音 -i -I

平 8=上 7 -i, -^wi 平 9=上 8 -iě 平10=上 9 -i
平14=上12 -iŋ 平12=上11 -^wiŋ 平11=上10 -iŋ -^wiŋ
平13 -^wiŋ₂

〔第三摂〕 主要母音 -əN

平15=上13 -əN, -^wəN 平16 -iəN, -^wiəN

〔第四摂〕 主要母音 -a -a

平23=上21 -a 平18=上15 -a 平19=上16 -ïa
平17=上14 -aŋ 平20=上17 -aŋ 平21=上18 -ïaŋ
平22=上19 -aw 上20 -aw
平24=上22 -aN 平25=上33 -aN 平26=上24 -ïaN

(17) 筆者は以前、平声韻と上声韻の対応を考え配分し、102韻を得たが（『西夏語の研究』上 pp. 26-27）、上声韻のみ単独の韻類の配分に誤りがあることに気付いた。以下改定した配分をあげる。これは『五音切韻』の百五韻の配分と一致する。

さきに、平74=上65としたが、いま平74=上68に改める。また上声68韻に一urを推定したが、チベット文字転写 grzu（流風138小類）をもつ文字は、上声69韻であることがわかったため、平75=上69に -ur を、平74=上68に -iě をそれぞれ推定したい。

〔第五摄〕 主要母音 -i -u

平27=上25 -uŋ 平28=上26 -u 平31 -uN
平29=上27 -iŋ 平30=上28 -i -^wi 平32=上29 -iN

〔第六摄〕 主要母音 -ɛ

平33=上30 -ɛ -^wɛ 平35=上32 -ɛŋ 平34=上31 -iɛ

〔第七摄〕 主要母音 -e

平36=上33 -eŋ -^weŋ 平37=上34 -e -^we 平41=上36 -eN
平39=上35 -iɛŋ 平40 -iɛ 平42=上37 -iɛN
平38 -e^y

〔第八摄〕 主要母音 -əw

平43=上38 -əw 平45=上40 -iəw 上41 -i^w
平44=上39 -ew 平46 -iəw 平47 -iw

〔第九摄〕 主要母音 -o -ɔ

平48 -oŋ 平53=上46 -ow 平54=上47 -oN 平57=上50 -i^wo
平49=上42 -ɔŋ 平52=上45 -ɔw
平51=上44 -iɔŋ 平50=上43 -iow 平55=上48 -ioN 平56=上49 -i^woN

〔第十摄〕 主要母音 -u

平58=上51 -u 平59=上52 -i^yu

〔第十一摄〕 主要母音 -ɛ

平61=上54 -ɛ 平60=上53 -iɛ 平62=上55 -ɛN

〔第十二摄〕 主要母音 -a -ɑ

平63=上56 -ɑ 平64=上57 -a

〔第十三摄〕 主要母音 -i -i

平65=上58 -i 平66=上59 -iě 平67=上60 -i -^wi

〔第十四摄〕 主要母音 -i -i

平68 -i 平69=上61 -i

〔第十五摄〕 主要母音 -o -ɔ

平70=上62 -ɔ 平71=上63 -oN 平72=上64 -ioN

〔第十六摄〕 主要母音 -e

平73=上66 -e 上65 -^we
平74=上68 -iɛ 上67 -^wiɛ

〔第十七摄〕 主要母音 -ur

平75=上69 -ur 平76=上70 -iur

〔第十八摄〕 主要母音 -ir -ir

平77=上71 -ir 平78 -ièr 平79=上72 -ir

- 〔第十九摂〕 主要母音 -ar -ar
 平80=上73 -ar 平81 -iar
 平82=上74 -ar 上75 -iar 平83 -ar₂
- 〔第二十摂〕 主要母音 -ir -ur -ər
 平84=上76 -ur 平85 -ər 平86=上77 -ir
 平88=上79 -iur 平87=上78 -iər
- 〔第二十一摂〕 主要母音 -or -or
 平89=上80 -or 平90=上81 -ior 平91=上82 -or
 上83 -^wor(?) 上84 -^wor(?)
- 〔第二十二摂〕 主要母音 -ir -ər
 平92=上85 -ir(?) 平93=上86 -iər(?)

平94 -^wo 平95 -iaN(?) 平96? 平97?

(平94韻以下は、いずれの摂にも所属しない)

以上に述べた二十二摂は、特徴的な母音系列にしたがって、さらに大きく三つに分別できる。

第一摂から第九摂までは普通母音の系列

第十摂から第十六摂までは、緊喉母音の系列

第十七摂から第二十二摂までは、捲舌母音の系列

さて、韻表や韻図の目的は、これらの韻母のそれぞれがどの声母と結合して、西夏語の有意味な音節を構成し得るか、換言すると西夏語の各音節の枠組を提示する点にある。

そこで序の中で、声母の代表字として、九音韻門の題のもとに三十六字母が掲げられている。しかし、その三十六字母は本来漢語の声母の体系を代表するものであって、西夏語の声母の体系を忠実に反映しているとは考え難いのである。西夏語の声母体系を代表する字母は作られなかったらしく、現存するどの文献にも、それは見出せない。ここでは、声母体系の一つの基準として漢語の三十六字母が使われたのであろう。

九音韻門の声母の音価を、一応つぎに掲げて、韻表の考察に入りたい。

重唇音類	p-	ph-	ph-	m-
軽唇音類	f-	fh-	fh-	mw-
	{w-	f-	f-	mv-}
舌頭音類	t-	th-	th-	n-

舌上音類	t̥-	t̥h-	t̥h-	n̥-	
牙音類	k-	kh-	kh-	ŋ-	
齒頭音類	ts-	tsh-	tsh-	s-	s-
正齒音類	tʃ-	tʃh-	tʃh-	ʃ-	ʃ-
喉音類	ʔ-	x-	ɣ-	ʔy-	
舌齒音類	l-	ʒ-			

第三節 西夏語韻表「九音之韻母纏繩順」の分析

上述したように『五音切韻』 No. 620, No. 621, No. 623, No. 7192 には、声母と韻母の組み合わせを表にした韻表がある。この韻表が、三十六字母を基準にして、西夏語の基本的な母音を代表する韻母との組み合わせ関係を表示したものであることは、一見して明らかである。しかし、そこに示されている韻母が各表ごとに、つまり、声母の種類によって、なぜ異同が起っているのかについては、まだ解決できない問題がある。

この韻表は、おそらく「九音之韻母纏繩順」の名で呼ばれていたと推測してほぼ誤りはない。

四種のテキストの内容を対照すると、つぎのようになる。

No. 620	重唇音類	輕唇音類	舌頭音類	舌上音類	牙音類	齒頭音類	正齒音類	喉音類	舌齒音類
丁数	欠	欠	5a	5b	6a	6b	7a	7b	8a
No. 621	重唇音類	輕唇音類	舌頭音類	舌上音類	正齒音類	喉音類	牙音類	齒頭音類	舌齒音類
丁数	1b	2a	2b	3a	3b	4a	4b	5a	5b
No. 623						喉音類	正齒音類		
丁数						2a	2b		
No. 7192							牙音類	齒頭音類	舌齒音類

その残片である No. 623 と No. 7192 は別にして、No. 620 と No. 621を比べると、声母の音類の排列順序が一致していない。しかし、さきにあげた『五音切韻』の序では、重唇、軽唇、舌頭、舌上、牙、齒頭、正齒、喉、舌齒の順に並べられ、ただ流風音が舌齒音と呼ばれている点が異っているが、『同音』の順序と全く合致するから、上掲の No. 620 が本来の順序を示していると考えて差支えない。

つぎに、その順序にしたがって、各写本を比較しながら、西夏語韻表の内容を検討して行きたい。

韻表1 重唇音類

韻	𐽀	𐽁	𐽂	𐽃
𐽄	𐽅	•	𐽆	𐽇
𐽈	𐽉	•	𐽊	𐽋
𐽌	𐽍	•	𐽎	𐽏
*𐽐	𐽑	•	𐽒	𐽓
𐽔	𐽕	•	𐽖	𐽗
	明	並	滂	幫

No. 621 重唇音類韻表

* 𐽐 が正しい。

重唇音類韻表は No. 621のみに残っている。No. 620 から見ると、本来これらの韻表には、縦罫と横罫が引かれていて、格子の目の中に西夏文字と小円が嵌め込まれた形になっていたと考えられるが、今はわかりやすく左の表のような形で提示した。横の第一列に幫 p- 滂 ph- 並 ph- 明 mb- が置かれ、かなり大きい字体で書かれている。もっとも左の上には韻の字が書かれ、縦列最左端に並べられたのが西夏語の韻類代表字であることを示している。この韻表では、上から平声 1 韻、平声 5 韻、平声 3 韻、平

声 51 韻、平声 8 韻が選ばれている。

この韻表 1 からつぎの諸点が判明する。

(1) これらの韻類には並母 ph- をもつ西夏語音節はまったくなかった。しかし並母の代表字は、上声 31 韻 phie であるから、西夏語でも b->ph- (低音調) の変化がいくつかの韻類で起っていたことは、十分に推測できる。たとえば *bie > phie (低音調) <稗>

(2) 平声 5 韻と滂母 ph- の枠には、上声 5 韻の字が入っていて、phu には、上声韻のみで平声韻はなかったことがわかる。𐽊 上 5 <成長する?> は、独字であるため、その初頭音推定に平声韻の反切を使えず pu, phu, mbu のいずれであったかを定める確証がなかったが、この韻表から、その声母が *ph- で

あったことが明白になった。

(3) 平声韻 3 と幫母 p- の枠には上声 3 韻の字が入っている。pīufi には平声韻はなかった。

また、この韻表は、各西夏字上声韻の反切上字の整理にも大きい証明力をもっている。たとえば、韻母の枠に入っている文字は、つぎの反切をもっている。

平 1	該	裊 蔀	平 51	齏	紆 蔀
平 5	蔀	紆 齏	平 8	裊	該 能

部分的にはあるが、*p- を代表する 2 つの反切上字のグループが成りたつ。

I 裊 = 該

II 紆 → 裊 → 蔀

(a) 紆 裊 蔀 (平 11)

(b) 裊 蔀 紆 (平 30)

I の系聯は上例からすぐわかるが、II の系聯は 2 つの反切(a)(b)を補えば同じように考え得る。この反切上字グループ I と II は反切字それ自体は直接には系聯しないけれども、それらが等価値 p- をもっていることを、この韻表が証明するのである。

各々の反切上字について、この種の証明をすることは非常に重要な操作ではあるが、あまりに繁雑すぎるため、すべての声母について述べることは、ここでは省略して、必要な範囲内で、以下反切の系聯関係を示してみたい。

この韻表 1 の西夏語音形式を、音素表記に改めると、つぎのようになる。

	韻表 1 重唇音類			
	mb-	ph-	ph-	p-
平 1-u	mbu	×	phu	pu
平 5-u	mbu	×	^{上 5} phu	pu
平 3-īufi	mbīufi	×	phīufi	^{上 3} pīufi
平 51-īɔfi	mbīɔfi	×	phīɔfi	pīɔfi
平 8-i	mbi	×	phi	pi

韻表 2 輕唇音類

輕唇音類の韻表も No. 621 に限られる。横第一列に非 f- 敷 fh-, 奉 fh- 微 mw- が置かれる。これにあたる西夏語の声母は、w- f- f- (低音調) mv- であったと推定したい。縦列の西夏語韻母には、上から平声 40, 平声 8, 平声 10, 平

𐽄	𐽅	𐽆	𐽇	𐽈
𐽉	𐽊	𐽋	𐽌	𐽍
𐽎	𐽏	𐽐	𐽑	𐽒
𐽓	𐽔	𐽕	𐽖	𐽗
𐽘	𐽙	𐽚	𐽛	𐽜
	微	奉	敷	非

No. 621 輕唇音類韻表

声19, 平声35の各韻が選ばれている。

この韻表から判明することは、つぎの諸点である。

(1) これらの韻母と f- が結合する音節は西夏語にはなかった。

(2) No. 620 の序では、微の代表字には 𐽅 (平51) が使われているが、この韻表では 𐽅 (平10) が使われている。これは単なる書き誤りではない。𐽅 mvi (平10) と

𐽅 mviɔɸi (平51) は共に<送る>を意味し、私がA形式B形式と呼んでいるいわば動詞の屈折形式に該当する。mviɔɸi は、人称接尾辞の前とか、禁止の助詞のあとで使われる形式である。この種の動詞のB形式がこの韻表の中に記入されているのである。

平声10韻の列に置かれた 𐽑 (平51) wiɔɸi<する>も、動詞 𐽑 wi (平声10) のB形式であった。これらの関係をわかり易く示すと、つぎのようになる。

	<送る>	<する>
A形式	𐽅 mvi (平10)	𐽑 wi (平10)
B形式	𐽅 mviɔɸi (平51)	𐽑 wiɔɸi (平51)

そして平声10韻の列には、A形式を書くべき筈であるのに、実際にはB形式(平51)を記入している。この事実は、あるいは動詞のB形式が12世紀の後半にはもはや使われなくなって、A B両形式の西夏文字の弁別があいまいになった段階を反映している可能性が考えられるが、この韻表に見られる事実は、大へん興味深い。

(3) 最後の列、平声35韻には、𐽛 mveɸi (平35) と 𐽜 weɸ (上54) がある。これは平声35韻 -eɸ と上声54韻 -ɸ が極めて近似した発音であったことを意味し、私の再構成形式が、この韻表の排列によって支持されたと言える。これもあるいは weɸ と weɸ が合一した段階を反映しているのかも知れない (cf. p. 107)。

この反切上字について述べておく必要がある。この韻表に限って言えば、非母には、反切は2類、微母には一類が認められる。

(18) 西田龍雄『西夏文華嚴經』II, あとがき p. 11 京都大学文学部 1976 を見られたい。

非 葭 履 鞞
 薜 履 鞞
 緒 鞞 鞞
 鞞 履 鞞
 鞞 鞞 鞞 (平声韻の反切)
 微 鞞 鞞 鞞
 鞞 鞞 鞞
 鞞 鞞 鞞
 鞞 鞞 鞞
 鞞 鞞 鞞

I. 履 → 鞞 ⇨ 鞞
 II. 鞞 → 鞞 ⇨ 鞞
 (平61) (平67) (平59)
 III. 鞞 ⇨ 鞞

I類とII類には w- を, III類には mv- を推定したい。
 しかし, この mv- が, 『五音切韻』が作成された当時には, すでに w- と合
 一していたことは, 十分にあり得た変化である (cf. p. 107)
 この韻表2の西夏語音形式を, 音素表記に改めると, つぎのようになる。

韻表2 輕唇音類

	mv-	f-	f-	w-
平40 -ie	×	×	×	wie
平 8 -i	mvI	×	×	wI
平10 -i	^{平51} mviof	×	×	^{平51} wiof
平19 -ia	mvia	×	×	wia
平35 -eh	mvēf	×	×	^{上54} wē

韻表3 舌頭音類

鞞	鞞	鞞	鞞	鞞
鞞	鞞 ○	鞞	鞞	鞞
鞞	鞞 ○	鞞	鞞	鞞
鞞	鞞 ○	鞞	鞞	鞞
鞞	鞞 ○	鞞	鞞	鞞
	泥	定	透	端

No. 621 舌頭音類韻表

舌頭音類の韻表は No. 620 と No. 621
 にある。この韻表では平声1, 平声5, 平
 声3, 平声20, 平声36の諸韻が選ばれてい
 る。まず, No. 621を基準にして, No. 620
 との相違点をあげると, つぎのようになる。
 (1) No. 620 では, 透母の列に小円が置か
 れ, 定母の列に透母の文字が並んでいる。
 これは, 上にあげたように, No. 621 の方
 が正しい。定母とこれらの韻母との結び付

きは、西夏語にはなかったことがわかる。

(2) No. 620 は泥母と平声36韻が結合する音節の代表字として **𐽀** (平36) nefi <赤い>をあげるが、No. 621 では上声33韻の **𐽁** <慈>が入っている。

(3) No. 620 では、泥母の文字と韻類代表字の間に、下にあげるように、小さい字体で余分に3字が書き込まれている。

		泥	
		𐽀	平 1
		𐽁	平 5
平 3	𐽂	𐽃	平 3
上17	𐽄	𐽅	平20
平36	𐽆	𐽇	平36

No. 620

この書き込みが何を意味するのかは、すぐあとで反切上字と関連して説明したい。

(4) 泥母と平声1韻が結合する音節代表字 **𐽀** は『文海』には含まれていない。しかし『同音』(新版)では、舌頭音類独字に属していて、**𐽀****𐽁**の注があるから、nefi と tu の合体字 nu であることがわかる。この文字は特定の意味をもたず、専ら表音

のために使われる合成字である。

泥母の反切上字を、この韻表に出て来る範囲内で整理してみると、つぎの三類の系聯関係が認められる。

泥母	𐽁	𐽂 𐽃	I	𐽂 ⇌ 𐽃
				(平14) (平7)
	𐽄	𐽅 𐽆	II	𐽅 → 𐽆 → 𐽇
				(平11) (平30) (平3)
	𐽈	𐽉 𐽊		𐽉
	𐽋	𐽌 𐽍	III	𐽋 ⇌ 𐽌
				(平3) (平11)

𐽂 **𐽃** **𐽄** は反切不詳であるが、あとの二字は、第III類の上字をもっていたと推定できる根拠がある。I類とII類には n-, III類には nd- をその音価としたい。No. 620, No. 621の泥母はIとII類に該当し、No. 621の余分に書かれた三字は、この反切上字III類に属する文字であった。

この韻表3の西夏語音形式を、音素表記に改めると、つぎのようになる。

韻表3 舌頭音類

	n-	th-	th-	t-	
平1 -u	nu	×	thu	tu	
平5 -u	nU	×	thU	tU	
平3 -iufi	^(No. 620) ndiufi	nīufi	×	thīufi	tīufi
平20 -afi	ndaŋi	naŋi	×	thaŋi	taŋi
平36 -efi	ndeŋi	neŋi	×	theŋi	teŋi

韻表4 舌上音類

舌上音類の韻表は、No. 620 と No. 621にある。上段に大きい字体で書かれた

𪛗	𪛘	𪛙	𪛚	𪛛
𪛜	𪛝	○	𪛞	𪛟
𪛠	𪛡	○	𪛢	𪛣
𪛤	𪛥	○	𪛦	𪛧
𪛨	𪛩	○	𪛪	𪛫

娘 澄 徹 知

No. 621 舌上音類韻表

た声母の代表字は知 𪛛- 徹 𪛜- 澄 𪛝- 娘 𪛞- であり、それに対応する西夏語の声母は、tš- tšh- と 𪛟- であった。それらの声母と結合する韻類として、ここでは平声55韻，平声29韻，平声56韻，平声41韻と平声44韻が選ばれている。

『同音』(新版)の舌上音類は、所属字がもっとも少なく、23字しかない。その中で、この韻表に出て来る文字は、**𪛛**，**𪛜**，

𪛥，**𪛧** の4字に限られ、いずれも娘

母の列に入っている。この韻表に記入された以外の文字は、牙音類の2字を除いて、すべて正歯音類に登録されている。当時は、鼻音声母の外、つまり知徹母には西夏語の正歯音をあてた方が妥当であると考えたからであろう。

上に掲げた No. 621を基準に No. 620との相違点を、つぎのように指摘できる。

- (1) No. 620では、徹母の列にはすべて小円が置かれている。
- (2) 娘母と平声55韻の代表字は、No. 621 では、**𪛛** (平50) šiow であるが、No. 620 では、**𪛛** (平55) 𪛛ion が使われている。後者の方が正しい。
- (3) No. 621 では、平声44韻と知母，徹母の結合に牙音類の文字が使われている。その理由はわからない。

韻表 5 牙音類

𪗇	𪗈	𪗉	𪗊	𪗋
𪗌	𪗍	○	𪗎	𪗏
𪗐	*𪗑	○	𪗒	𪗓
**𪗔	𪗕	○	𪗖	𪗗
𪗘	𪗙	○	𪗚	𪗛
𪗜	𪗝	○	*𪗞	𪗟
	疑	群	溪	見

No. 621 牙音類韻表

*** 𪗑 の誤 * 𪗞 の誤

No. 620 𪗑 𪗞 の誤

牙音類の韻表は、No. 620, No. 621, No. 7192の三種類があるが、あとの二つはほぼ一致する。No. 620 と No. 621 では、かなり大きい異同があり、No. 620 は、韻母のより細かい弁別を表にしていると言える。この韻表は、見溪群疑と韻類平声1, 平声3, 平声9, 平声11, 平声20の結合関係を表示したものである。No. 620 と No. 621 は共に平声9韻(-iě)の代表字を字形のよく似た平声28韻(-u)の代表字と書き誤っている。

No. 620 と No. 621の大きい相違は、溪母と群母の列に認められる。つぎに両者を対照する。

	No. 621		No. 620	
	溪	群	溪	群
平 1	平 1	○	𪗎 平 1	𪗏 平 1
平 3	平 3	○	○	平 3
平 9	平 9	○	○	平 9
平11	平11	○	○	平11
平20	上17	○	上17	○

No. 620 では、No. 621 の溪母の列にある平声3, 平声9, 平声11の文字を群母の列に移し、群母の平声1韻のところには、別の文字を置いている。したがって、No. 620 では平声1韻に溪母と群母の文字が対立するのである。この二つの文字の『文海』における反切を調べると、つぎのようになっている。

溪 母 𪗎 𪗏 𪗐 𪗑 群 母 𪗒 𪗓

平声1韻の反切下字は二類あって、互に系聯しないが、上記の 𪗐 と 𪗑 は、共にI類の方に属して互に系聯するから、両者の弁別は反切上字にあると見なければならない。ところが 𪗎 は上声韻(上10)で直接反切はわからない。

しかし『同音』(旧版) 牙音29小類の平声韻の反切**玃****玃**を利用すると、**玃**と系聯関係を示していると考え得るのである。

玃 ----> **玃** ⇔ **玃** ← **玃**

したがって、この溪母も群母も実際には弁別がなく、共に kh- であったことになる。ところが『文海』では、この二つの kh_u を対立する音節として扱っているのである。すると両者の弁別は、一体どこにあったのだろうか。ここで、はっきりと相違しているのは、溪母に置かれた文字の反切上字に上声韻字を使っている事実である。このことは、平声20韻の溪母の列に上声17韻の文字を配置するのと共通する何らかの特徴、たとえば音調 (register) の相違を反映しているのかも知れない。おそらく、さきに述べた平声対平去声がそれにあたるのであろう。一方あとで述べる齒頭音類などにおける文字の配置を見ると、このような細かい弁別は、この韻表ではすでにかなり曖昧になっていて、単に漢語の声母体系に無理に合わせて文字を配置した印象が強い。ここでは、これ以上の推測をさけて、『文海』において弁別されている場合にのみ kh₁- と kh₂- を書き別けて表記しておきたい。No. 620 の群母と疑母の反切上字を、ここで使われた範囲内で整理すると、つぎのようになる。

群 母	玃	玃 玃	I	玃 ⇔ 玃 ← 玃
	玃	玃 玃		(平3) (平11) (平1)
	玃	玃 玃	II	玃 ⇔ 玃
	玃	玃 玃		(平4) (平27)

この韻表における配置から I 類と II 類共に kh₂- を推定する。kh₁u と kh₂u の対立はつぎの単語に見られる (kh₂- の方で弁別しておく)。

玃	kh _u (平) 碧細珠	玃	kh ₂ u (平) <*gu 梟
玃	kh _u (平) 献上する	玃	kh ₂ u (平) <*gu 厭離
玃	kh _u (平) 鐸		
玃	kh _u (上) 小箱		kh ₂ u に上声の音節はない
玃	kh _u (上) 山犬		

疑 母	𪛗	𪛘	𪛙	I	(平3)	(平11)	(平1)
	𪛚	𪛛	𪛜		𪛛	𪛘	𪛗
	𪛟	𪛠	𪛡		𪛡	𪛟	𪛟
	𪛢	𪛣	𪛤		𪛣	𪛢	𪛢
	𪛦	𪛧	𪛨				(平3)

この韻表の配置から，反切上字 I 類と II 類共に ng- を推定して誤りはない。この韻表 5 の西夏文字を音素表記に改めると，つぎのようになる。

韻表 5 牙 音 類

No. 621

No. 620

	ng-	kh-	kh-	k-		ng-	kh-	kh-	k-
平1 -u	ngu	×	khu	ku	平 1	ngu	kh ₂ u	kh ₁ u	ku
平3 -iufi	kh ₁ iufi	×	kh ₁ iufi	k ₁ iufi	平 3	ng ₁ iufi	kh ₁ iufi	×	k ₁ iufi
× 平28	^{平9} ngië	×	^{平9} khië	^{平9} kië	平 9	ngië	khië	×	kië
平11 - ^{上10} wi	^{上10} ng ^{wi}	×	kh ^{wi}	k ^{wi}	平11	ng ^{wi}	kh ^{wi}	×	k ^{wi}
平20 -afi	ngafi	×	^{上17} kha ^{fi}	ka ^{fi}	平20	ngafi	×	^{上17} kha ^{fi}	ka ^{fi}

韻表 6 齒頭音類

𪛗	𪛘	𪛙	𪛚	𪛛	𪛜
𪛛		𪛛	𪛜	𪛛	𪛜
𪛜		𪛜	○	𪛜	𪛜
𪛟		𪛟	○	𪛟	𪛟
* 𪛠		* 𪛠	○	𪛠	𪛠
𪛡		𪛡	○	𪛡	𪛡
	邪	心	從	清	精

* 𪛠 (平51) の誤

No. 621 齒頭音類韻表

齒類音類の韻表は No. 620, No. 621, No. 7192 にある。No. 7192は右側の下半分が欠けるが，文字の配置は No. 621と全く一致する。

この韻表は，声母精 (ts-) 清 (tsh-) 從 (tsh-) 心 (s-) 邪 (s-) と，韻母，平声 1 韻，平声 3 韻，平声 33 韻，平声 51 韻および平声 20 韻の結合関係を表示したものである。

No. 620 と No. 621の間の大きい異同は，牙音類と同じく，清母と從母，心母と邪母の列にある。まずその対照を示してみよう。

No. 620	清母	従母	No. 621	清母	従母
	平 1	平 1		平 1	平 1
	○	平 3		平 3	○
	平33	○		平33	○
	○	平51		平51	○
	平20	○		平20	○
	心母	邪母		心母	邪母
	平 1	平 1		平 1	
	○	平 3		平 3	(空)
	○	平33		平33	
	○	平51		平51	自
	上17	平20		上17	

この対照表からわかるように、No. 620 と No. 621 は共に、平声 1 韻で清母と従母が、No. 620 では、心母と邪母がそれぞれ対立している。

清母	羸	姦 羸	<衿持>	tshu
従母	羸	姦 羸	<粗い>(漢語より借用)	tshu
心母	羸	羸 羸	<…より>	su
邪母	羸	羸 羸	<部姓>	su

これらの反切下字は系聯しているから、すべて同じ韻母をもっていたことは確かである。反切上字も、**姦** と **羸** は、共に同音節 tshif であって、また心母と邪母の例では、全く同じ文字が両方に使われているから、反切の上では、いずれも弁別されていないことになる。したがって、少なくともこの韻表に関しては、清母と従母、心母と邪母の弁別は、漢語の声母体系に割当てた全く架空の弁別であったと言って差支えがない。

つぎに清母の反切上字の系聯を、この韻表に関して示しておきたい。

清母	羸	姦 羸	羸 → 羸 = 姦 (平1)
	羸	姦 羸	(平30) (平3)
	羸	羸 羸	(平11)
	羸	羸 羸	
	羸	羸 羸	
	羸	羸 羸	

これらの反切上字はいずれも tsh- を代表する。

韻表 6 の西夏文字を音素表記に改めると、つぎのようになる。

韻表 6 齒頭音類

No. 620						
	s-	s-	tsh-	tsh-	ts-	
平 1 -u	su =	su	tshu	tshu	tsu	
平 3 -iufi	sīufi	×	tshīufi	×	tsīufi	
平33 -e	sɛ	×	×	tshe	tse	
平51 -iɔfi	sīɔfi	×	tshīɔfi	×	tsīɔfi	
平20 -afi	safi	^{上17} safi	×	tshafi	tsafi	
No. 621						
	s-	s-	tsh-	tsh-	ts-	
平 1 -u	(空)	su	tshu	tshu	tsu	
平 3 -iufi	白	*sīufi	×	tshīufi	tsīufi	
平33 -e		se	×	tshe	tse	
平51 -iɔfi		*sīɔfi	×	tshīɔfi	tsīɔfi	
平20 -afi		^{上17} safi	×	tshafi	tsafi	

韻表 7 正齒音類

齶	禪	牀	禿	禿	禿
茶	○	齶	○	禿	禿
前	○	牀	○	*禿	禿
夏		禿	○	禿	禿
盤		○	○	禿	禿
齒		禿	○	禿	禿
	禪	審	牀	穿	照

No. 621 正齒音類韻表

* 禿 (上31)
禿 (上2)

正齒音類の韻表は、No. 620, No. 621, No. 623 にある。No. 623 は中央より右側下部が欠けた残片である。この韻表は、声母の照母 (tš-), 穿母 (tšh-), 牀母 (tšh-), 審母 (š-), 母 (š-) と平声 2 韻, 平声34韻, 平声 35韻, 平声44韻, 平声19韻の結合関係を表にしたものである。No. 620と No. 621 の大きい相違点は、審母と禪母にある。

No. 621	審母	禪母	No. 620	審母	禪母	No. 623	(審母)	禪母)
	平 2	○		平 2	平 2		平 2	平 2
	平34	○		平34	平34		平34	平34
	平35			平35	平35		平35	平35
	○			平44 =	平44		○	平44
	平19			平19	平19		平19	平19

No. 623 は審母の列に禪母の代表字が置かれ、禪母の列は、小さい字体でその列の左側に書き入れられている。概略 No. 620と一致すると見てよい。三種の韻表すべて牀母には文字は配置されていない。

No. 620 では、すべての韻類に、審母と邪母の対立が認められる。果してどのような性格の対立があったのだろうか。各々の反切を検討してみたい。

	審母		邪母	
平 2	雍	雍 韻	茶	雍 隳
平34	牀	雍 綴	龍	雍 綴
平35	羸	?	綱	?
平44	鞞	鞞 鞞	鞞	鞞 鞞
平19	龍	?	雍	?

平声35韻および平声19韻のこれらの文字の反切は、詳かではないが、そのほかの反切上字は二類に分れて系聯する。

- I 雍 = 茶 ← 鞞
(平10) (平2) (平9)
- II 雍 = 雍 (雍 雍鞞)
(平2) (平29)

平声 2 韻では、この I 類が邪母にあてられ、II 類が審母に属している。つまり『文海』で、はっきりと弁別された二種の音節が、この韻表においても、異った位置を与えられているのである。

ここでは反切上字 I 類の声母を \check{s}_1- 、II 類の声母を \check{s}_2- として書き別けておきたい。

茶	$\check{s}_1\check{i}u$ (平)	涼しい	雍	$\check{s}_2\check{i}u$ (平)	古い
牀	$\check{s}_1\check{i}u$ (平)	足かせ			

$\check{s}_2\check{i}u$ には上声韻はない。

𪚩 š₁iu (上) 根本 𪚪 š₁iu (上) 樹 (漢語より)
 𪚫 š₁iu (上) 肉 𪚬 š₁iu (上) 多数

平声34韻，平声44韻は，反切上字 I 類が双方に使われており，同じ文字や同音節の文字が出て来るため，西夏語自体の対立を反映したものではなく，単に漢語の声母体系に割当てたものと見做して差支えがない。

なお No. 620では 𪚩 が 𪚪 に，𪚫 が 𪚬 に，それぞれ誤って書かれている。また穿母平声34韻の枠に 𪚭 (上36) tšheN が入る (『同音』独字)。

韻表 7 の西夏文字を音素表記に改めると，つぎのようになる。

韻表 7 正 齒 音 類					
No. 620	š-	š-	tšh-	tšh-	tš-
平 2 -i <u>u</u>	š ₁ i <u>u</u>	š ₂ i <u>u</u>	×	tšh ₁ i <u>u</u>	tš ₁ i <u>u</u>
平34 -i <u>e</u>	š ₁ i <u>e</u>	š ₁ i <u>e</u>	×	^{上36} tšheN	tš ₁ i <u>e</u>
平35 -e <u>fi</u>	š ₁ e <u>fi</u>	š ₁ e <u>fi</u>	×	tšh ₁ e <u>fi</u>	tš ₁ e <u>fi</u>
平44 -e <u>w</u>	š ₁ e <u>w</u>	š ₁ e <u>w</u>	×	tšh ₁ e <u>w</u>	tš ₁ e <u>w</u>
平19 -i <u>a</u>	š ₁ i <u>a</u>	š ₁ i <u>a</u>	×	tšh ₁ i <u>a</u>	tš ₁ i <u>a</u>
No. 621	š-	š-	tšh-	tšh-	tš-
平 2 -i <u>u</u>	×	š ₁ i <u>u</u>	×	tšh ₁ i <u>u</u>	tš ₁ i <u>u</u>
平34 -i <u>e</u>	×	š ₁ i <u>e</u>	×	tšh ₁ i <u>e</u>	tš ₁ i <u>e</u>
平35 -e <u>fi</u>	(空)	š ₁ e <u>fi</u>	×	tšh ₁ e <u>fi</u>	tš ₁ e <u>fi</u>
平44 -e <u>w</u>	自	×	×	tšh ₁ e <u>w</u>	tš ₁ e <u>w</u>
平19 -i <u>a</u>	自	š ₁ i <u>a</u>	×	tšh ₁ i <u>a</u>	tš ₁ i <u>a</u>
No. 623	š-	š-	tšh-	tšh-	tš-
平 2 -i <u>u</u>	š ₁ i <u>u</u>	š ₂ i <u>u</u>	×	tšh ₁ i <u>u</u>	tš ₁ i <u>u</u>
平34 -i <u>e</u>	š ₁ i <u>e</u>	š ₁ i <u>e</u>	×	×	tš ₁ i <u>e</u>
平35 -e <u>fi</u>	š ₁ e <u>fi</u>	š ₁ e <u>fi</u>	×		
平44 -e <u>w</u>	š ₁ e <u>w</u>	×			
平19 -i <u>a</u>	š ₁ i <u>a</u>	š ₁ i <u>a</u>			

韻表 8 喉音類

韻	𪛗	𪛘	𪛙	𪛚
後	𪛗	○	𪛘	𪛚
𪛘	𪛘	○	𪛙	𪛚
𪛙	𪛙	𪛗	○	𪛚
𪛚	𪛚	○	𪛘	𪛚
前	𪛚	○	○	𪛚
	喻	匣	曉	影

No. 621 喉音類韻表

喉音類の韻表は No. 620, No. 621, No. 623 にある。これは影 (?-), 曉 (x-) 匣 (ɣ-), 喻 (?-) の声母と平声17韻, 平声1韻, 平声3韻, 平声4韻, 平声34韻との結合関係を表示したものである。No. 623 は, 中央下部から左側の上部にかけて欠けているが, 残った部分を見ると, No. 620, No. 621 と異なる分配を示している。まず三者の対照をつぎにあげたい。

No. 620	影	曉	匣	喻	No. 621	影	曉	匣	喻
平17	平17	○	平17	平17	平17	平17	○	平17	平17
平1	上1	○	平1	上1	上1	平1	○	平4	平4
平3	平3	○	平3	平3	平7	○	平3	上2	上2
平4	平4	○	平4	平4	平4	平4	○	平4	平4
平34	平34	○	上36	平34	平34	○	○	上53	上53

No. 623	影	曉	匣	喻
平17	平17	○	平17	平17
平1	上1	平1	○	○
	○	○	平3	平3
	平4	○	平4	
	平34	○	○	

以上の対照を通じて見られる韻母の相通関係ならびに西夏文字配置の誤りを反切上字の整理と関連して, もっとわかり易く説明しよう。

	代表字	反切	反切類	再構成形式
影母 平17	[620 621 623]	𪛚	𪛚𪛘	I ?ah
平1	[620 621 623]	𪛘 (上1)	𪛘𪛙 (平声韻反切)	II ?u

平 4	$\begin{bmatrix} 620 \\ 621 \\ 623 \end{bmatrix}$	𪗇	𪗈𪗉	I	?uh
平34	$\begin{bmatrix} 620 \\ 621 \\ 623 \end{bmatrix}$	𪗊	𪗋𪗌	I	?ɛ
平 3	[620]	𪗍	𪗎𪗏	I	?ɪuh
	[621]	𪗐 (平7)	𪗑𪗒	I	?ɪuh

いまあげた反切の上字は、つぎの2類(反切I, 反切II)にまとまる。

反切I類 𪗇→𪗈→𪗉⇌𪗎←𪗍←𪗊←𪗋
 (平1) (平29) (平3) (平69) (平3) (平9) (平28)

反切II類 𪗏⇌𪗌 𪗐
 (平2) (平10) (平29)

このI類とII類ともに?-を推定できる。[620]平3 ?ɪuh と [621]平7 ?ɪuh
 がこの韻表で相通する事実は、私の再構成音が妥当であることを証明する。

曉母 匣母

	代表字	反切	反切類	再構成形式
平17	$\begin{bmatrix} 620 \\ 621 \\ 623 \end{bmatrix}$ 𪗓	𪗔𪗕	III	xah
平 1	$\begin{bmatrix} 620 \\ 621 \\ 623 \end{bmatrix}$ 𪗖	𪗗𪗘	IV	xu
平 3	$\begin{bmatrix} 620 \\ 621 \\ 623 \end{bmatrix}$ 𪗙	𪗚𪗛	IV	xɪuh
平 4	$\begin{bmatrix} 620 \\ 623 \end{bmatrix}$ 𪗜	𪗝𪗞	III	xuh
(誤り)	[621] 𪗟	𪗠𪗡 (平4)	I	?u

上にあげた反切の上字は、つぎの2類(反切III, 反切IV)にまとまる。

反切III類 𪗜⇌𪗝
 (平4) (平27)

反切IV類 𪗖→𪗙
 𪗗 (平3)

この反切上字Ⅲ類とⅣ類には共に x- を推定できる。

喻母

	代表字	反切	反切類	再構成形式
平17	[620 621 623]	𪛗	𪛗𪛗	V ʔyaf
平4 [621]	𪛗	𪛗𪛗	V	ʔyuf

この反切上字は、上掲Ⅰ類～Ⅳ類に対立する第Ⅴ類をなしている

反切Ⅴ類 𪛗 → 𪛗 → 𪛗
 (平4) 𪛗 (平79)
 (平76)

この反切上字Ⅴ類には ʔy- を推定できる。つぎの二字，

[620] 𪛗 (上1) (反切Ⅱ類) ʔu [620] 𪛗 (平3) (反切Ⅰ類) ʔiuf

がこの位置にあるのは誤りであるが、後者は ʔiuf と ʔyiuuf の近似から十分起り得た誤りであった。また [621] 𪛗 [上2] (反切不詳) が平声3韻の列に入っているのも、(上2) ʔyiu: (平3) ʔyiuuf の音形式の近似から理解できる。

平34 [620] 𪛗 𪛗 𪛗 I ʔyie (ʔkie)

[621] 𪛗 反切不詳 喉音独字 ʔyie (ʔkie)

この -ie と -ie が相通する事実も私の再構成音の妥当性を証明するものである。この二字は『掌中珠』で夷皆，夷耿の漢字表音をもち，チベット文字表音では hgi, hge となっているから，

	『掌中珠』	チベット字表音	『同音』
𪛗	真夷	夷皆 hgi, hge	喉音28 (旧版)
𪛗	運ぶ	夷耿	喉音独字

私は、それぞれに ʔkie と ʔkie を推定していた。あるいはそれは東部地域の発音であったかも知れない。また十二世紀後半では、西夏語自体が ʔkie > ʔyie の変化を完了していたとも考え得るのである。

なお No. 620で匣母平声34韻の枠に、上声36韻の字が入っている。

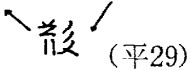
𪛗 (上36) xeN

平声 2 韻 -iu がさほど際立った差異をもたなくなっていたのであろう。

この韻表では、漢語の来母と日母に該当すると考えられる声母として 2 種、
l- と z- をあげているが、実際の西夏語の流風音類の声母は、あとで述べるよ
うにもっと種類が多い。それ故、ここでは流風音類とは言わずに、舌歯音と称
したのかも知れない。

つぎに来母と日母の反切上字を、ここで使われている範囲を中心に整理して
みよう。

来母	平 1	該	請	該	平20	該	該	該
	平17	該	請	該	平10	請	該	該
	平 2	該	請	該				

これらの反切上字は I 類 該 → 請 ← 該 であり、l- を推定できる。


日母	平 1	該	該	該
	平17	該	該	該
	平10	該	該	該

これらの反切上字は II 類 該 ↔ 該 であり、*z- を推定して誤りはない。
(上2)

ただ z- の実際の音価が [ʒ-] であったのか [z-] なのか、それとも [ʒz-] な
のかは決め難い。

この韻表 9 の西夏文字を音素表記に改めると、つぎのようになる。

No. 620	韻表 9 流風音類		No. 621, No. 7192	
	z-	l-	z-	l-
平 1 -u	^{上1} zu	lu	zu	lu
平17 -af	zaf	laf	zaf	laf
平 3 -iu	×	^{平2} liu	×	^{平2} liu
平20 -af	×	laf	×	laf
上 9 -if	^{平10} zif	^{平10} lif	^{平10} zif	^{平10} lif

以上の考察を総括すると、つぎのように言える。

これらの韻表の特徴は、それがあくまで漢語の声母体系を主体に作られたものである点にある。したがって、無声出気音の系列、ph- fh- th- kh- ʈh- tsh- tʂh- と s- にはそれぞれ二種類があった。その中の一つは、多くの場合、所属韻字を欠いていたが、牙音 kh- と齒頭音 tsh- では、はっきりと弁別されている。しかもそれが『文海(宝韻?)』における2系列の弁別の仕方と合致しているのである。そして kh₁- と kh₂-, tsh₁- と tsh₂-, s₁- と s₂- の弁別は、声調の種類と関係して、さらにまた西夏語の音韻変化の歴史と関連して、重要な意味を含んでいるものと思われる。『文海(宝韻?)』は、あるいは、はじめの方の韻類では、韻母を詳しく弁別したが、あとの方になって来ると、次第に弁別がゆるやかになって来ているのかも知れない可能性も考慮すべきであろう。

一方で No. 620, No. 621, No. 623 の三種の写本は、相互にやや相違するところが見られ、その相違が単なる誤写であると判別できる場合と、西夏語自体の音形式の特徴を何らかの形で反映したものであると考えざるを得ない場合があった。たとえば、平声34韻と上声53韻の混同は、平34 -iɛ (普通母音) と上53 -iɛ (緊喉母音) の西夏語自体の音形式の近似に基づく混同であった。また -iuh (平3) と -iu (平2) の混同もこの韻表が作成された当時には、すでに、両者の間にきわだった弁別特徴がなくなり、両者は統合されていく方向に進んでいたこともこの韻表は示している。十一世紀の中頃において近似した韻母を多く弁別した西夏語の音韻組織が、十二世紀後半になると、そのいくつかは弁別性を失い、統合されはじめていたであろうことは、この韻表作成時代あるいは既存のテキストを筆写する際に起った事実の背景として、十分考えなければならないのである。

私が以前に再構成した十一世紀の韻母体系の推定形式が、この韻表に見られる諸韻母の相通関係をよく支持し得たことは、大きい喜びであった。

(未完)